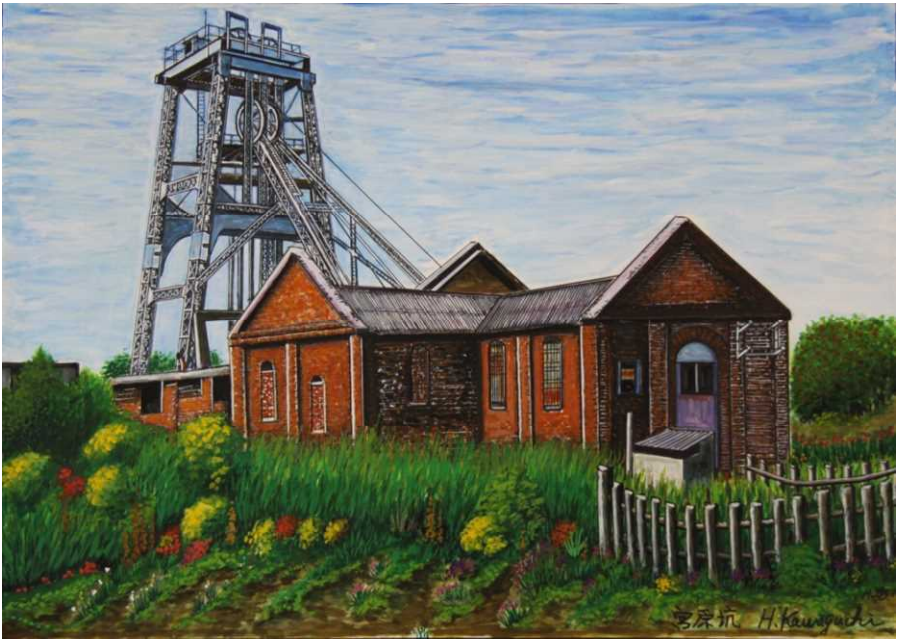
炭鉱とくらしの記憶

ーエピソード集　３ー



宮原坑　川口晴久さん 作

平成 30 年３月

大牟田市

はじめに

「炭鉱とくらしの記憶　エピソード集」は、三池炭鉱に関する人々の記憶を次世代に伝えていくことを目的に、平成 24 年度から作成を行っています。これまで、平成 25 年と平成 27 年に作成いたしましたが、今回も多くの皆様から、三池炭鉱にまつわるエピソードや写真などをお寄せいただき、第３集目の発行となりました。

今回も、三池炭鉱があった時代の社宅生活、家族との交流、炭鉱の仕事を綴った思い出話などを掲載させていただきました。中でも、三川坑の炭じん爆発事故があったとき、坑内で作業されていた方の救出までの様子を綴った手記は、実体験に基づく内容となっています。

ほかにも、大牟田市が市内の小学６年生を対象に行っている近代化産業遺産バス見学会での感想文を掲載しており、未来を担う子どもたちの郷土への想いを感じていただける内容となっております。

お寄せいただいた数々のエピソードは、大牟田市の一時代を築いてこられた人々の生活、苦労、想いの記録であり、これを語り継いでいくためにも、多くの方々にお読みいただきたいと考えております。

平成 29 年に大牟田市は市制施行 100 年を迎え、同時に次の時代に向けて、新たな一歩を踏み出しました。これからも、市内に残る数多くの近代化産業遺産と併せ、このエピソード集に記されているような人々の想いや出来事を後世に語り継ぎながら、近代化産業遺産を活用したまちづくりを進めてまいります。

最後になりますが、本冊子の作成に当たり、原稿や写真等をご提供いただいた皆様に、心よりお礼申し上げます。

平成 30 年３月

大牟田市長　中尾昌弘

目　　次

第１部　写真編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２部　投稿編
　１．社宅生活
　　四山炭鉱社宅（叔母と叔父の想い出）・・・・・・・・・・・・・・・18
　　社宅の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
　　子どもの頃の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
　２．家族との思い出
　　母への思い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
　　炭鉱電車で越境通学していた兄（私）と弟・・・・・・・・・・・・29
　３．子どもの頃の思い出
　　小学校修学旅行での三池炭鉱の記憶・・・・・・・・・・・・・・・34
　　ふるさとの世界文化遺産
　　「三池炭鉱関連資産」とともに・・・・・・・・・・・・・35
　４．炭鉱の仕事　炭鉱への思い
　　中国炭坑との技術交流・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
　　三池炭鉱・閉山から 20 年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
　５．三川坑炭じん爆発事故
　　生還　ー生きとし生けるものをー・・・・・・・・・・・・・・・・56
　炭鉱の思い出インタビュー　～「三池炭訪」より～・・・・・・・・71

第３部　三池炭鉱の歴史を未来へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75

資料編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89

第１部　写真編

平成 29 年度に「広報おおむた」などを通じて募集した三池炭鉱関連や昔の大牟田の様子を撮影した写真を掲載しています。

松本百合子さん（大牟田市在住　89 歳）提供

三池争議のとき、夫がバイク隊の一員として、総評本部に陳情活動に行かれたときの写真。東京まで、６日かけて行かれたそうです。

途中の京都にて（平安神宮　応天門前）

東京にて（新宿区若松町付近）

緑ヶ丘社宅にて（昭和 30 年代前半頃）

緑ヶ丘社宅　桧町　拝賀式(昭和 31 年)

緑ヶ丘社宅　祭りでの集合写真

（昭和 30 年代前半頃）

社宅の皆さんと（昭和 30 年代前半頃）

田島チホさん（柳川市在住）提供

三川町通り（昭和 30 年代か）

大牟田駅前付近（昭和 30 年代か）

金子千里さん提供
昭和 50 年代の四山社宅

大津里子さん（大牟田市在住）提供

「第一鉱保安記録達成記念」の手ぬぐい

昭和 62 年当時、有明坑にお勤めだった夫が、会社から頂いてこられた、「第一鉱保安記録達成記念」の手ぬぐい。

松本等さん提供

四山社宅（昭和 40 年代前半）

四山港沖竪坑
（昭和 40 年代前半）

四山鉱大運動会①（昭和 40 年代前半）

四山鉱大運動会②（昭和 40 年代前半）

古家眞弓さん（大牟田市在住）提供

三池新労、職員組合　運動会①

（昭和 52 年　グリーンランドにて）

三池新労、職員組合　運動会②

（昭和 52 年　グリーンランドにて）

三池新労、職員組合　運動会③

（昭和 52 年　グリーンランドにて）

三池新労こども大運動会

（昭和 51 年　グリーンランドにて）

第２部　投稿編

平成 29 年度に「広報おおむた」などを通じて募集した三池炭鉱関連のエピソードです。

社宅生活、炭鉱での仕事など、三池炭鉱にまつわる思い出を紹介します。

１．社宅生活

四山炭鉱社宅（叔母と叔父の想い出）

山口　貴美子
（大牟田市在住　60 歳）

昭和 31 年。私は四山社宅で生まれました。父は電化に勤めていましたが社宅に空きがなく、叔母夫婦の住む四山社宅の二階に間借りをして住んでいました。同じ年に叔母にも子供が生まれました。生まれて間もなくその子は亡くなりました。お乳を少ししか飲んでいないのにお風呂に入れられ力尽きてしまったのでした。小さな亡骸（なきがら）は延命公園の火葬場で焼かれ、骨壷を社宅に持って帰りました。

次の日、叔母の胸からはお乳が噴き出すように流れました。なんと皮肉なことでしょう。それからしばらくの間、叔父は仕事を休みがちになり、海へと向かっていました。毎日毎日、寄せては返す波を見ているうちに少しずつ元気を取り戻しました。やがて、魚釣りをするようになりました。私が小学生の頃は、ボラがよく釣れていました。ボラを刺身にして生姜をすり、醤油をつけてみんなで食べました。「ああ、うまか。生き返ったたい。」と言いながら笑いました。ひとときの幸せと最高の御馳走でした。

叔父は、定年まで地の底にもぐり、塩をなめて、石炭を掘りました。そして、62 歳の若さで亡くなりました。

平成８年、四山坑の櫓（やぐら）は爆発させられました。衝撃の映像がテレビで流れ、叔父の死と重なり寂しくなりました。

平成 27 年に三池炭鉱関連の資産が世界遺産に登録され、大

牟田市民として誇らしい気持ちになりました。全て私が生まれる前から、日本を誇る炭鉱として、動いていたものでした。

今、宮原坑の櫓(やぐら)の前に立つと不思議な感覚にとらわれます。地の底から叔父さんたちの声や機械の音が聞こえてくるようです。日本の産業を支え、大牟田の街の発展に尽くした炭鉱の労働者、外国の労働者、全ての人たちのことを忘れないようにと櫓(やぐら)が教えてくれているようです。

叔母さんと山口さん
四山坑グラウンドにて(昭和 32 年)

社宅の思い出

木庭　砂雄
（大牟田市在住　67 歳）

私は生まれてから高校卒業後まで（昭和 25 年～同 44 年）、当時の三池染料（現在の三井化学）笹原南社宅に住んでいました。

当時の笹原南社宅は２軒長屋が主で、６畳と３畳の２部屋に、どこの家庭も親子６、７人が住んでいました。水道は各家庭にはなく、屋外に隣家との境に蛇口が一ヶ所あり、共同で水道を使用していました。

当時を振り返ると一番の思い出と浮かぶのは、共同風呂でしょう。各家庭に風呂はなく、でかい共同風呂に入っていました。

午後５時～午後８時 45 分までの利用でしたが、友達と誘い合って、一番風呂に入っていました。我々団塊の世代の子供たちで、風呂はいい社交場でもあり、いい遊び場でもありました。あまりふざけ過ぎて、風呂焚きのおじさんから叱られることも度々でした。

風呂が故障したら笹原北社宅の風呂を利用させていただき、笹原北社宅の皆さんに申し訳なく、皆感謝の気持ちで入っていました。

親戚など来客があって風呂へ入れるときは、社宅管理人より木製の「入浴許可書」をもらって来客者を風呂に入れていました。

社宅の思い出として次に浮かぶのは、「売店」です。当時、それぞれの社宅には会社の福利厚生の一環として「売店」があり、給料前など「通い帖」なる物があり、社員の所属職場、名前、捺印など記入すると、それで買物ができ、２～３か月後に

給料から天引きされる制度でした。

月１度ぐらいだったか、コークスの配給もあり、押し車を押して、もらいに行っていました。炭鉱の社宅などは、石炭、豆炭の配給もあっていました。

経済的には、決して裕福ではなかったけど、「狭いながらも楽しい我が家」そのものだったと記憶しています。

子どもの頃の思い出

田中　祐一
（大牟田市在住　61 歳）

社宅生活

私の父は、三池炭鉱三川坑に測量士として働いていました。私が子どもの頃、私たち家族は、荒尾市の緑ヶ丘社宅に住んでいました。

父は、日曜日になると、知り合いの家の子どもの勉強部屋をコツコツと造っていました。数十軒分は造ったと思います。もちろん、私たち兄弟の部屋も父が造りました。

父は、社宅の庭に泉水を造り、鯉と金魚を５０匹ずつぐらい育てていました。

土曜日の夜には、父の知り合いが大牟田と荒尾から訪れ、宴会をしていました。多いときには 10 人ぐらい来ていました。お客さんの中には小遣いを 1,000 円くれるので、とてもうれしかったです。

鶯町（うぐいすちょう）の配給所で練炭の配給がある日、私は少し遅れて一輪車を押して配給所に行っていました。配給分をもらって待っていると、余りの豆炭等ももらえ、少し重かったですが、一人で小鳩町（こばとちょう）の社宅まで押して持ち帰っていました。そして、七輪に練炭の火をおこして、お湯を沸かしたり、料理に使ったり、更には暖房にも使っていました。

梅雨明け前後になると、社宅の中の消毒があっていました。白い服を着た数名の人が機械を押してきて、家の玄関から殺虫剤をゴオゴオと入れていました。私は幼い頃、それが怖くて泣いていました。

私の母は、社宅の畑に唐芋を作っていました。たくさん作っており、近所に配るほどありました。家庭菜園もあって、オクラ、トマト、きゅうり、なすを作り、また、梨の木もありました。

三川坑炭じん爆発事故

昭和 38 年 11 月、三川坑の炭じん爆発で多くの人々が亡くなったことを思うと残念でなりません。

三川坑の炭じん爆発が起こったのは、私がちょうど荒尾市の緑ヶ丘小学校の１年生のときでした。覚えているのは、家に祖父、父、母と私がいて、父が夜勤明けで寝ていたときに、あの爆発が起こったことです。

「ドカーン」と響く音が、緑ヶ丘の小鳩町の社宅にも聞こえました。父は救助隊として２回坑内に向かいました。そのとき、ガスを吸ってしまい、CO 患者になりました。

元々、酒が好きであった父ですが、事故で同僚を失ったこともあり、事故後一時期は、酒を浴びる日々でした。
その後、父は常一番[1]となり、定年まで働きました。

[1] 朝から夕方までの昼間だけの勤務のこと

２．家族との思い出

母への思い

羽江　邦之
（大牟田市在住　62 歳）

平成 29 年６月、母が仏国土（ぶっこくど）へと旅立った。その折、いろいろな出来事が頭の中で、走馬灯のように巡った。

親子で四国に旅行に行ったことや、家族で餅つきをしたこと等、いろんな出来事が頭に浮かび、目頭に熱いものを感じた。

思い出の中でも、強く心に浮かんだのが、自分が幼少期に過ごした三池争議の中で、母と一緒に集会等で聞いた歌である。

がんばろう　つき上げる空に
くろがねの男のこぶしがある
もえあがる女のこぶしがある
闘いはここから闘いはいまから

作詩：森田ヤエ子、作曲：荒木栄の『がんばろう』は、数えきれないほど、聞いた歌であり、心の中に染み込んでいる。多くの労働者が、強い連帯意識を持ち、力強く歌っていたのを幼い子どもなりに感じていたようである。

昭和 28 年の三池主婦会結成､昭和 35 年の安保と三池の争議。当時は、熱気にあふれていたようで、座り込みやデモに参加していた母や父の姿が心の中に残っている。そして、多くの死者と CO 患者を出した昭和 38 年の三川坑の炭じん爆発では、親族や友人を気遣う父母の姿が思い出される。

一枚目の写真は、集会か若しくは大会に参加している父の写真（向かって右）です。二枚目の写真は、母が座り込みをして

いるところ（向かって左）です。三枚目の写真は、「昭和 37 年３月思い出」とある写真で、主婦会のメンバーが揃っての記念撮影（母は上部真ん中にいます）のようです。

母は万田坑に入ったことがあるとも聞いています。三池炭鉱に関わってきた父や母。既に他界し、思い出だけが残っています。写真を整理する中で、育ててくれた父母に対する感謝の念が湧いてきました。「ありがとう」そして「冥福を」。

一つひとつの家族が、三池炭鉱に関する思い出をその家族の中で後世に伝えていくことを願っています。

羽江さんの父（写真右）

座り込みに参加する母（写真左）

主婦会メンバーと（昭和 37 年 3 月）
（写真上部中ほど）

炭鉱電車で越境通学していた
兄（私）と弟

ペンネーム　ミッチー
（大牟田市在住　76 歳）

私は、昭和 23 年４月当時の三川小学校（現みなと小）へ入学。その後、昭和 28 年６月（６年生の時)、それまで住んでいた三川町の家から荒尾市の社宅へ転居しました。

そこは「大平社宅」というところで（炭鉱勤務者以外の会社の社宅もありました)、炭鉱電車でたくさんの人が通勤していました。

「大平駅」を中心に

三池港駅 → 四ッ山駅 → 原万田（はらまんだ）駅 → 大平（おおひら）駅 ← 宮内（くない）駅 ← 大谷駅 ← 平井駅

このような駅があったと記憶しています。

炭鉱労働者専用の通勤電車でしたが、大牟田市の三川小学校へ通学のため「四ッ山駅」まで弟と一緒に 10 ヶ月間無断で？乗せてもらっていました。

小学校６年生の私と３年生の弟が初めて炭鉱電車に乗ったとき、その車内では、ほぼ全員の人が「♪みんな仲間だ♪炭掘る仲間♪」や「♪がんばろう♪突き上げる空に♪」等の労働歌を声高らかに通勤電車内で歌っていたのを、聞いてビックリ。弟と二人、小さくなっていました。毎朝いろんな労働歌を聞かされました。

そしてある日の朝、高台にあった大平駅で（徒歩で家から 500～600ｍぐらいあり、駅の手前 20ｍぐらいは急こう配の上り坂でした）、弟が、「兄ちゃん、忘れ物した。」と言ったので、「まだ間に合うけん家に帰って取ってこんかい。」と返事をして、高台の駅のホームで待っていました。『早く戻ってこいよ』と祈りつつ、『電車が遅れて来ますように』と願っていましたが、定刻どおり炭鉱電車は「大平駅」に着きました。弟の姿が坂の下に見えましたが、無情にも発車してしまいました。仕方なく私と弟は炭鉱電車の線路の上をトボトボと四ッ山駅まで歩き、それから学校まで歩いて行きました。もちろん学校は・・・遅刻です。遅れた理由を先生にキチンと伝えましたので、怒られませんでした（弟の方はどうだったのか分かりませんが？）

炭鉱電車は、１番方（常昼者）、２番方、３番方（夜勤）の勤務者に合わせて運行されており、１番方退勤時の最終便は 18 時 05 分前後だったと思います。弟は３年生でしたので、15～16 時の早い時間帯に一人で炭鉱電車に乗って帰っていたと思います。私は６年生でしたので帰りが遅くなることもありました。

当時、三川・三里・駛馬（はやめ）南・駛馬（はやめ）北小学校で学校対抗の軟式野球大会があり、三川小６年生の選抜チームが結成され、私もそのチームの一員になれました。

放課後、先生のノックやバッティング練習等々、一生懸命になり、時間のたつのも忘れていましたので、何回も１番方（常昼者）最終便の四ッ山発 18 時 05 分の電車に乗り遅れることがありました。

その時は四ッ山駅から大平駅まで炭鉱電車の線路の上を歩いて帰る日でした。ただ原万田の所で今の JR の路線の上を通って行かねば帰れなかったので、ハラハラ！ドキドキ！しながら下の見える JR の線路の上を恐る恐る！渡って帰ったことが

何度もありました。

炭鉱電車で昭和 28 年６月～29 年３月（卒業式まで）の 10 ヶ月間越境通学をしました。今思うと、３年生の弟は、帰りは一人でしたので、『心細かっただろうナ』、『泣きたかっただろうナ』、『よくがんばって一人で帰ったナ』と感心しています。

今から 64 年前の“炭鉱電車での貴重な体験と忘れられない思い出”です。

３．子どもの頃の思い出

小学校修学旅行での三池炭鉱の記憶

中津　賢吾
（熊本県菊池市在住　80 歳）

私が小学生だった時の記憶である。私が小学校６年生の時（昭和 24 年)、修学旅行があった。１クラス約 50 人で５クラスあり、学年全体では 250 人ぐらいいたと思う。私は、それまで生まれ育った菊池から出たことがなく、初めて電車に乗って市外に出ることもあって、楽しみにしていた。行き先は三池炭鉱。戦後の復興時ということもあり、復興の原動力となる石炭鉱業の社会見学という意図があったのかもしれない。その他の場所にも行ったが、三池炭鉱だけを鮮明に覚えているのは、その時グループ（５人）の班長を任されたからだろう。

電車で大牟田市に着くと、四山坑へ向かった。竪坑櫓（やぐら）のケージに乗り込み、地下へ潜った。坑内に降りるのが初めての体験であったこと、班長になったことから緊張していた。坑底に着くと、坑夫の方が石炭採掘について説明をしてくれた。実際に坑底を歩いてみると恐ろしい気持ちとわくわくする気持ちが入り乱れた。トロッコに石炭を積んで坑夫が押している姿や顔を真っ黒にさせて作業している姿を見て、炭鉱で働くことの大変さを感じた。坑内にいたのは１時間ぐらいだっただろうか。地上に戻ると坑内を歩けたことについて感動し、無事に戻れたことにほっとしたように覚えている。修学旅行を終え学校に戻ってから、修学旅行の体験を紙芝居にしてクラスで発表した。

この私の体験は今から約 70 年も前のことだが、私の甥が大牟田に就職したことから、ふと三池炭鉱に行った時の記憶がよみがえった。

ふるさとの世界文化遺産
「三池炭鉱関連資産」とともに

梅井　克師
（大牟田市在住　67 歳）

１．はじめに

平成 27 年７月「世界文化遺産」となった宮原坑櫓（やぐら）は我が家の東側にそびえ立ち、庭の借景となっている。また、三池炭鉱関連資産は、我が家の周辺に点在しており、私の成長とともにあり、終の棲家となる宮原町の記憶遺産として、これらの資産の思い出を記したい。

２．三池集治監

私が幼稚園児の頃、まさかこの壁が、多くの服務囚が宮原坑まで炭鉱労働に駆り出された集治監跡であろうとは・・・当時は知る由もない。

昭和 30 年頃、私は、大牟田市上官町にある「若草幼稚園」に２年間通園した。今でこそ、送迎バスや幼稚園の保母の送迎があるが、当時は、近所の園児と連れ立って通園した。

この通園路は、現三池工業高校裏塀の南側から東側を取り囲むように建ち並ぶ宮原社宅の中にあり、同じ歳の政治君とともに２～３人で通園していた。宮原社宅内には東西を貫く道路が通っており、私たちは、東側から社宅内に入り、出入口脇の講堂（社宅集会所？）から右に折れ、高くそびえた赤煉瓦（れんが）（戦後モルタル塗りとなったようだが、部分剥離（はくり）により赤煉瓦の印象が強い。）の東側をよたよた・よちよちと歩きながら、煉瓦塀

が長く長く続いていた記憶と、なんと高い壁なんだろうと思いながら通った。記憶の中では、赤煉瓦横の道路は、現在の住宅街の道路がより低かったと記憶する（背が低かった分、赤煉瓦塀がより高く感じたのかもしれない)。

蛇足ながら、昭和 50 年頃に宮原社宅は解体されたが、その後、宅地分譲地として整備され、主に三井関連企業を退職した方が居を構えたと聞く。また、社宅敷地の南側に「山ん神（やまん神さん)」の社があり、坑内の安全と炭鉱労働者の災害予防のための守り神となっていた。山ん神は、この社宅跡の宅地分譲が終了した後も、しばらくはそのまま鎮座していたが、数年後、山ん神も解体されてしまい、その敷地も分譲されることとなった。

解体された石垣や石碑は、しばらく駛馬天満宮境内の裏に置かれていたが今はない。

３．窓から望む「宮原坑」

小学生となり、私の子供部屋として２階（小学生～社会人）が与えられ、駛馬北小学校（平成 30 年度から、駛馬小学校となる）の生活がスタートすることとなった。

朝、布団から身を起こせば、窓の東側に「宮原坑」の櫓が見えていたが、よもや、約半世紀後に、世界文化遺産になろうとは・・・

私の部屋の窓から東側を一望すれば、奥の方から権現堂、その手前正面高台に宮原坑の銀色の櫓が見え、この高台の一番手前に三池集治監の服務囚が宮原坑の炭鉱労働に駆り出されて通った道路が見える。

私の父が、「この道路は、三池集治監より鎖につながれて笠をかぶった服務囚が、鎖の音とともに往来する姿が見えていた

ということを祖父が語っていた。」と私に話してくれた。

４．窓から望む「がらば」

「がらば」をご存知だろうか？

口頭では「がらば」というが、漢字を当てれば「殻場」であろう。

子供部屋から見える宮原坑の高台西側の一段低くなった所を「がら場」と呼んでいたが、今は宅地となっている。

がら場は、坑内から採炭されて石炭燃料として商品化できない選炭後のカスの捨て場（つまり、ボタ捨て場）である。休日などに私の部屋の窓から、このガラ場で採炭する人の姿が見える。商品として流通しないものの、中には石炭のカケラなども混じっており、物資が不足する時代、これを自宅に持ち帰り燃料とするのである。

がら場で、すり鉢状の穴を掘れば、多少崩れることがあるが、ある日、がら場で慌ただしい人の動きを目にした。穴を掘り過ぎて、穴が崩れて人が埋まる事故が発生したのだ。埋まった人がどうなったかは分からない。

５．駛馬北小学校はマンモス校

駛馬北小学校に入学した昭和 32 年は、大牟田市制 40 周年記念事業として産業科学大博覧会が開催された年であり、また、昭和 34 年には人口が 21 万人に達しようとする勢いがあり、大牟田の街が活気に満ちあふれた頃である。

このような中にあって、三井鉱山の企業合理化が提案され、総資本対総労働の闘いとして、日本労働史上最大の三池争議が、昭和 34 年から 35 年まで 300 日近くにも及び、また、日米安全保障条約阻止運動と時を同じくした激動の時代であり、テレビ

ニュースでこれらの争議の状況が、遂次放送されていたことが、子供心に強く残っている。

大牟田の人口は、この出来事を契機として、昭和 34 年をピークに減少の一途をたどることとなった。この動きは、児童数にも影を落とすこととなり、駛馬北小学校の入学時の児童数が 2,266 人、学級数は 41 クラス（１クラス平均、約 55 人）を数えていたものの、卒業時の昭和 37 年度には、児童数 1,724 人、学級数 36 クラス（１クラス平均、約 48 人）と減少することとなった。

大牟田市は石炭鉱業とその関連産業である化学機械工業などを中心として発展してきた町であり、当時、駛馬北小学校の校区内には、宮原社宅・青葉社宅・黄金（こがね）社宅・合成社宅・三坑（さんこう）社宅・米生（よねお）アパート等（三井東圧化学を含む）の社宅が林立して児童数も多く賑わっていた。社宅群より通学する児童は、校内活動においてはいずれも連帯感が強く、大運動会では目を見張るものがあった。運動会は地域対抗の色合いが濃く、生徒も親も対抗意識をむき出しにして各競技に熱中したものである。

とりわけ、部落対抗リレー（今は、地域対抗リレーと呼ぶ）での結束は強く、また、子供の数も層も圧倒的に厚く、優勝を争うのは、いつもこの社宅群のチームであった。しかしながら、これらの地域の家族は、時代とともに企業の合理化等によりこの地を離れてしまわなければならなかった。したがって、今も市内に住んでいる私の同級生というのは数少なく、同級生は、全国各地に散らばって活躍しているものと思う。

市内一のマンモス校として賑わっていた駛馬北小学校の子供たちが住んでいた社宅群は解体され、当時を偲ぶことはできない。

６．桜町の地下道

駛馬北小学校の春の遠足は、荒尾市の万田坑付近にある万田公園であった。

万田公園がある万田社宅一帯は、万田坑を中心として数多くの社宅整備が行われ、一つの街が形成されていた。万田坑の正門前には、売勘場（三池商事の売店であり、私たちは「万田売店」と言っていた。）があったが、子供心に薄暗い店内だったとの印象が残る。

この万田売店南側には、今も万田公園と山の神の一部が残るが、これらは鉱員の憩いの場として桜の名所であり、安全を願う癒しの場であったと思う。また、夏はプールが開放され、私の父に連れられてこのプールを泳いだことがある。プールは異常に深かった記憶があり、防火水槽を兼ねていたのではないかと思うが、今は埋め戻されて確認することができない。ただ、このプールの縁とこれに沿って藤棚の下に観客用のコンクリートの階段が残っており、これらは今も見ることができる。

話が逸れたが、遠足は、桜が咲く頃であったと思う。公園までの行程は、学校を出て県道にある一部橋から桜町の十字路を南進し、万田坑の櫓が目に入った頃、左側に少し入ったところに地下道があり、これを抜けると万田坑の正門横に出る。

地下道の中は暗く、灯りと言えば少ない裸電球と天井から漏れる万田坑の敷地内の炭鉱電車軌道敷に設けられた鉄格子の明かり取りだけである。この暗い地下道を通って公園へ行くときは、先生と児童が連れ立って行くので怖くはなかったが、この年頃、一人ではなかなか通ることができなかった。

（映画の「見知らぬわが町」で最初に地下道に入るシーンがあり、入口の映像には万田坑横入口が撮影されているが、地下道出口から駆け抜けるシーンは、別の場所を映像化し

ている。）

７．宮原坑の敷地で三角ベースボール遊び

宮原坑は昭和初期、揚炭・入気・排水などの役割を終えて閉坑した後、昭和 30 年初期まで、宮原坑（第二竪坑）の西側は、原っぱであった。このため、私は近所の遊び仲間に連れられて、宮原坑がある高台の南西方向にホームベースを設置し、棒切れとボールで三角ベースボール遊びや凧（たこ）揚げなどを楽しんでいた。

しかしながら、昭和 33 年頃からだと思うが、この地に現在１棟残っている鉄筋コンクリート造りの当時はモダンな住居が整備（通称：三坑アパート又は白坑社宅）され、米生中学校（現在の宮原中学校）への通学は、宮原坑を横目にこの住宅地の中を通うこととなった。

８．宮原坑の排水で洗濯？

宮原坑は、当初、明治初期から官営三池炭鉱の操業開始以来、旧来の主力であった大浦坑、七浦坑、宮浦坑等の命脈（めいみゃく）を伸ばすべく、排水の用を兼ねる坑口としての役目が開削の計画であったが、操業後は、揚炭・入気・排水・人員昇降・その他を兼ねる主力坑となった。

第一竪坑は揚炭、入気、排水が主であり、第二竪坑は人員昇降を主として、排気・排水・揚炭を兼ねる機能分担が行われていたが、昭和６年、主力坑であった大浦坑、勝立坑、七浦坑とともに、宮原坑も閉坑となった。（近代化遺産ホームページより）

三池集治監の服務囚が宮原坑の炭鉱労働に駆り出されて通った道路の崖下（法面下（のりめん））に、宮原坑から排水（排水の一部だ

と思うが、詳しくは知らない）を行っていた１ｍほどの煉瓦で作ったトンネル状の排水口がある。

私の母親が子供の頃、近所の人に連れられて排水口がある崖下の道路を通って宮原売店（三池商事の売店）に買物に出掛けるとき目にした出来事として、この排水口で洗濯若しくは野菜類を洗う人を見かけたと言う。坑内排水が地域に恩恵をもたらしていたと思うが、母親の小さい頃の記憶であり、何を洗っていたのかは定かでない。

今は湧水がわずかに流れる程度であり、また、煉瓦造りの排水口は安全のため木材で封鎖されている。

９．炭鉱電車で手裏剣を作成

小学校の高学年になると、行動範囲も広がるとともに危険な遊びを覚え始める。

現代は子供の遊び道具はおもちゃ屋で購入するが、我々団塊の世代は物資が不足し、遊び道具は自分で考え、自分で工夫して作成していた。今では、学校内で問題となる道具や保護観察となるかもしれない「禁じられた遊び」を上級生から学んだ。その一つが、釘手裏剣や釘ナイフを作って楽しむ遊びである。

釘手裏剣に使う釘は、家屋の建設・解体現場に落ちている五寸釘を加工して、これを忍者が使う手裏剣のように木の壁や雨戸などに的を作って投げつけ点数を競う遊び（現代のダーツ）であるが、的によく刺さるための工夫として、炭鉱電車が通るレールの上に釘を置き、車輪に轢（ひ）かせて圧延した後、釘の先端を砥石やコンクリートなどで研いで鋭くしていた。

また、釘ナイフも、電車の車輪で圧延した釘の先端の片側を砥石で研いで鋭くし、小刀として使っていたが、当然切れ味は良くない。

当時は、宮原坑の東側の三池炭鉱専用鉄道を石炭や岩塩などを積んだ炭鉱電車がよく通過しており、私たちは東金ヶ坂橋脇の崖から軌道敷に降りて五寸釘を並べ、竹藪（やぶ）などに隠れて待ち、炭鉱電車が通り過ぎた後、轢いた釘を確認して拾い上げ、急いで逃げた。

この炭鉱電車は、人が走る程度の速度であるため、轢いた釘が遠くに飛んで行方不明となることが少なく、また、轢く瞬間をじっくり確認できるため、子供心にこの瞬間を毎回感動した思い出がある。

この釘手裏剣などは、密かに我が家に持ち帰っていたが、親にも見せたことがなかった。子供だけの世界である。

１０．米生中学校への通学と宮原坑

米生中学校に進級し、通学路は、三池集治監の服務囚が炭鉱労働に駆り出されて通っていた高台の道路法面に取りついている細い通路を上り、当時モダンな三坑アパート（又は、白坑社宅）の中を通り抜けて東金ヶ坂橋を渡り、米生アパート（当時は高層で展望が良かったが、今は、宮原坑見学用駐車場）の前を通る通学ルートとなった。

通学時に宮原坑の櫓の巻揚機が回転しているのを目にすると、櫓下の巻揚機室に近寄って中を見ていた。赤煉瓦外壁の明かり窓から差し込む光に照らされ、作業員が乗った昇降箱を油で黒光りした太いワイヤーが巻き上げる様子をのぞき、地下から上ってくる独特の臭気（グリスの臭気？石炭の臭気？）を嗅（か）ぎながら、道草を食い通学していた記憶がある。

卒業後、あのような匂いを嗅いだ経験がない。

１１．炭鉱電車で米生中学校に登校

この件も、今では学校内での問題や保護観察などの扱いになるかもしれない事件であると思うが、半世紀前のことであり時効扱いとして許していただきたい。

当時、米生中学校には、駛馬北小学校と駛馬南小学校の卒業生が進学しており、新たな交友関係も広がることとなるが、その中に、藤田町から通学する元気な友人がいた。ある朝、教室で突然「寝坊したけん　炭鉱電車に乗ってきた。」と言う。米生中学校の通学区域内では、藤田町が一番遠距離となっており、中学生の足では 30 分を超える時間を要するため（通学自転車というのがない)、神田町辺りから貨車を引いた炭鉱電車に乗り、宮原坑横の東金ヶ坂橋辺りで下車して登校してきたとのことである。

炭鉱電車は速度が遅いため、乗車するときは物陰に隠れ、炭鉱電車が通り過ぎる頃を見計らって一番後ろに飛び乗ることが可能である。

ある時、この友人の家まで遊びに行くことになり、炭鉱電車で下校したことがある。現在、三川坑跡に展示してある炭鉱電車のいずれかが牽引（けんいん）する貨車と思うが、意外と簡単に飛び乗ることができた思い出があり、これを契機として、列車に乗ってのんびり旅する「青春 18 きっぷ」のファンとなる。

私の子供の頃の遊びの世界では、この炭鉱電車のスピードが都合の良い適度な速度となっていたが、成人となり、車を運転して早鐘（はやがね）踏切を通過する際、電車が遮断機の向こうをゆっくり走る姿を見ながら、何でこんなに遅いのかイライラすることとなった。

炭鉱電車は私の幼い頃の遊びに恩恵をもたらし、感動を与え夢中になって楽しく遊んだ良い思い出があるにも関わらず、わ

がままな大人となってしまった。

今は、廃線に伴いイライラもなくなり、これらの電車は本来の役目を終えるとともに子供に対する思い出を残しながら、三川坑跡に静かに休んでいる。

しかしながら、三池炭鉱専用鉄道の廃線に伴い、早鐘踏切自体は撤去され跡形もなく思い出の中にしか残っていないが、道案内をするとき「早鐘踏切」は、今も紛れもなく生きている。

１２．炭鉱電車の岩塩落とし

三池炭鉱専用鉄道では海外から輸入された岩塩（正式の名称は知らないが、ピンク色で塩辛く、私たちは、「山塩」と呼んだ。）などを貨車に山盛りにし、むき出しの状態で積載して三池港から大浦町の工場まで運搬していた。

このため、先輩と共に軌道敷横の崖の竹藪に潜み、この貨車が通る際、予め集めた軌道敷の砕石を山崩しのごとく、この山塩の塊の頂上を目がけて投（とう）てきして落とし、この山塩を学校で級友に見せびらかしたり（大牟田弁）、分け与えるなどにより、その塩辛さを味わうのである。

それが何だと思われるかも知れないが、日常生活では山塩はまず目にすることがないため、持っていることに優越感に浸ることと、また、山塩をかじって単に塩辛さを味わうのであって、どうというのではないが、遊具などが少ない時代の遊びの一つである。

１３．臼井（うすい）社宅は田んぼを埋め立てて整備

米生中学校の南側一帯に、臼井社宅と野添（のぞえ）社宅があり、母親が里帰りをする時、社宅内の臼井売店（三池商事の売店）に買物に出掛けていた。母親はこの社宅敷地の一部は、実家の田ん

ぼを埋め立てて整備されたものだと言う。

米生中学校時代のこの辺りの様子は、学校西側の法面にある上り坂の左側下には「山の神」があり、境内に大きく成長した貝塚伊吹（かいづかいぶき）が植えられており、また、学校南斜面のため池を中心とした周辺は、現在住宅地となっているが、私が学生である頃、ため池はもっと大きく、またその周辺は畑として耕作が行われており、母の実家の茶畑で茶摘みをしたことがある。しかしながら、昭和 60 年を迎える頃だったと思うが、開発行為により分譲地として整備されることとなった。このため、開発に当たっては、ため池を狭くして米生中学校の南斜面の段々畑とともに分譲地として広げることが計画されたが、当地域は歴史的な背景もあり、地方自治法に基づき「財産区」として大牟田市財産区特別会計により、当地域の財産が清算されたところである。

つまりこのため池は、谷を利用してため池が作られ（時代は知らないが・・・）、ため池の下の方が臼井社宅として整備される前の田んぼに農業用水を供給するために作られたため池であった。

エネルギー転換により、石炭鉱業は衰退。三井鉱山より買収が行われて臼井社宅や野添社宅が整備されたものの、労働者の減少による転出に伴い、社宅の解体が行われ、草が生い茂った空き地となっていた。今は、ソーラー発電のパネルが一面に広がっている。

１４．銀色の櫓に感動

進学して大牟田南高校に通学することとなり、宮原坑の前を通ることもなくなったが、依然、宮原坑はそこにある。

昭和 40 年代も宮原坑は稼働し、櫓は腐食防止のためと思うが、定期的に塗り替えが行われていた。ある下校時、通学路と

なった駛馬天満宮の前から、東側を見ると真新しく塗り直されて銀色に輝く宮原坑の姿が青空に映え、美しい姿を見たことは若い頃の感動の一コマである。

私は、駛馬天満宮の氏子であるため、毎月、欠かさず出向いている。お参りを終えた後、楼門をくぐりながら、正面の鳥居の間から垣間見える銀色の立ち姿もまた美しい。

１５．日常風景としてある宮原坑

社会人となり、朝の出勤時は宮原坑を背にするが、帰宅時は玄関に近づくと真正面に宮原坑が見える。当たり前の風景ではあるが、雨の日・晴れの日・夕日に映える日・雪の日・満月の日など、宮原坑はそれぞれ表情が変わる。最近は、ライトアップが始まり、また新たな景色が広がる。

これまで宮原坑を見上げた景色は、主に午後の景色だけで、日々の移ろいを感じていた。私もやがて 70 の齢を迎える頃となり、毎朝、庭から東の空を見上げ手を合わせるようになる。この際、真正面に宮原坑の姿が目に入る形となり、今までとは違った朝の表情を目にするようになった。

１６．三井専用鉄道の軌道敷を散策して有明プラザへ

平成９年三井三池炭鉱の閉山とともに、三井専用鉄道が廃止されたが、廃線後、しばらくは注意書きの看板などはないため、地域の方が犬を連れて散歩する光景を目にするようになった。

自分なりに廃線後、この軌道敷はどうなるのだろうと疑問と、何か活用できないだろうかとの興味が湧いたことから早鐘踏切付近から軌道敷を通って、子供と共に荒尾市にある有明プラザを目指すことにした。

廃線直後は諏訪川の跨線橋（こせんきょう）には柵もなく、歩きながら歴史

がある跨線橋の上に立つことができたという満足感に浸った。また、専用鉄道にある駅のプラットホームも残っており、このホームで労働者が日々の生活を営んでいたとの思いにふけったところである。

軌道敷を進む中で、アメリカ映画「スタンド・バイ・ミー」の線路を歩くシーンと重なり、また、軌道敷を歩いていると中学生の時、藤田町まで炭鉱電車に乗って行った記憶が蘇る。

軌道敷は、のんびりした風景が広がり、誰ひとりおらず静かであった。

有明プラザに到着し、コーヒーを飲みながら迎えの車を待つ楽しいひと時を味わった。

１７．世界文化遺産登録と駛馬天満宮

駛馬天満宮には、学問の神様である菅原道真の自画像をご神体として祀(まつ)られており、全国の天満宮の中でも古くから宮原町の地に鎮座し、毎年、春と秋には「鷽(うそ)替え祭り」の大祭が３月（以前は２月）と９月の 24 日と 25 日に行われている。

私の子供時代である昭和 30 年代までは、大祭となると境内から神社前までの道路に露店が並び、また、境内にはサーカス小屋、お化け屋敷の興行や舞台で演芸が行われており、境内は近隣から大勢の人が押し寄せ、ひしめき合う状況を呈し、夜遅くまで賑わいを見せていた。しかしながら、昭和 30 年代半ばのエネルギー転換による人口減少や近隣社宅の解体などにより、年々参拝客も露店も少なくなり、当時の賑わいは嘘のようで、昔の面影はない。

この様な中で、平成 27 年７月、宮原町内に鎮座する宮原坑が世界文化遺産に登録されたことに伴い、大型バスや自家用車での見学者が増加することとなったが、宮原町内に一時的であ

れ大勢の人が押し寄せて賑わいを見せたのは、昔の駛馬天満宮の鷽替え祭り以来ではないだろうか。

今後、宮原坑や鉄道敷跡の整備・保存・活用により、宮原町地域の賑わいの創出と活性化に期待するものである。

４．炭鉱の仕事

炭鉱への思い

中国炭坑との技術交流

藤木　英弘
（大牟田市在住　70 歳）

はじめに

三池炭鉱閉山から 20 年。毎年開催されるＯＢ会が共に仕事をした方々との唯一の交流の場となり、寂しさを感じます。反面、20 年経過しても盃を傾けられる絆の深さを改めて感じます。これと同じく三池炭鉱と中国の炭鉱とは絆で結ばれた技術の交流がありました。中国語を学びたい動機に中国炭坑との技術交流に関わりたいとの思いがありました。三池在職中や東京転勤後にその機会を得ました。両者を区別して書くべきですが、資料もなく、頼りになるのは記憶だけです。区別はとても無理ですからまとめて書くことをお許しください。

１．歴史は繰り返す

（財）石炭開発技術協力センター主催の技術交流や研修を中国山東省兗州鉱務局鮑店炭坑で開催しました。北京から列車で 10 数時間の内陸部です。孔子・孟子にゆかりが深い社殿があり、休みを利用して参詣しました。とは言え、宿舎の窓を開けるとスモッグの匂い、牛を使って耕し、麦踏みと思われる光景。昭和 30 年代後半から 40 年代にかけての大牟田を思い出しました。病院、幼稚園、学校等、炭坑運営の施設が多く点在していました。これもかつての大牟田に似ており驚いたものです。

国境を越え、歴史との立場から見れば歴史は繰り返すものかも知れません。

２．社会体制の違い

真新しい住居を見つけました。炭坑関係者の説明では「かつて彼らが住んでいた地区は、石炭採掘で陥没した。」「だから我々が新しい住居を建設してやったのだ。」とのことでした。日本では考えられない発想です。これは技術以前の問題です。この様な体制の国から産出される石炭と価格競争するのは容易でないことを溜息混じりで考えたものです。

高度成長期の日本では、多くの企業が生産性の向上に取り組み、コスト削減を目指しました。研修開始当初は、「生産性の向上」をなかなか理解してもらえませんでした。「生産性が向上し、余った人員はどうする？」この単純、かつ不可解な質問には驚きました。当時の日本は人手不足や労務倒産の言葉がまかり通っていました。バブル経済が弾け、不況が長引く昨今の現状を考えると『何か大切のものを忘れていたのではないか』と感じる時があります。

３．通信あれこれ

国際電話も携帯で可能な現在ですが、当時はまだまだでした。フロントに設置してある国際電話（らしきもの）は、時間になると金庫に仕舞い込み、使用できなくなります。相手が話し中で通話できなくても、「相手が故障」と言われ何某かの料金を徴収されました。

使用中は、女子の服務員がそばにいて時間を測定します。そして、料金の支払いです。

ＦＡＸも似たような状況で、枚数に関係なく回数で支払います。送信できなくても回数にカウントされ、うんざりしたものです。

時折、服務員が電話の取り次ぎをしてくれました。血相を変

え部屋に来るので驚いた時もあります。日本語が分かるのかと思いましたが、日本人の宿泊は私一人ですから、ためらいなく私の部屋に来たわけです。なるほど、これでは言葉の壁はないと変な感心をしたものです。

４．学ぶ心構え

週末に５時間をかけ、自転車で家に帰る研修生。炭坑の技術研修とは関係ありませんが、学校と思われる施設では、夜の８時になれば消灯します。しばらくするとロウソクと思われる灯りが点灯します。それから約２時間の勉強となるのです。この光景を目の当たりにすると学ぶ意欲、心構えが根本的に違うことを感じました。経済発展を続ける中国の底力は、その様な環境から生まれたものかも知れません。

精神論だけで物事が解決するわけではありませんが、豊かさ、便利さに慣れすぎると大切なものを失うことにもなります。改めて考えさせられる昨今です。

５．奇怪な光景

宿舎から青島（チンタオ）に向かう高速道路を走行中、考えられない光景を目にしました。道路に「とうもろこし」らしきものが延々と敷いて（並べて）あります。まさかと思い尋ねたら「そうだ、とうもろこしだ」と平然と答えます。車の走行で脱穀するとの答えには、二度ビックリしました。高速道路を脱穀機代わりに使用するとは驚くばかりです。今でも本当だったのかと思う時があります。この経験から固定観念にとらわれず接していく必要性を痛感し、気分が楽になった記憶があります。

６．得たもの

自然条件が大きく異なる採掘現場ですから我々の考えが全て通用するものではありません。しかし、基本的な考えは同じです。基本を大切にする技術者同士との考えで接してきました。自然を相手に仕事をするエネルギー産業では、基本を守ることは極めて大切で忘れてならないことです。この考えを再認識したのは、何事にも代えられない収穫でした。

おわりに

本来ならもう少し具体的に書くべきですが、資料皆無で抽象的な表現に終始しました。あえて固有名詞を使用しなかったのは間違った記憶で関係者に迷惑を掛けては大変と思ったからです。ご勘弁ください。

東日本大震災から原発の安全性等を巡り論議されています。石炭火力発電所の見直しも一例です。石炭→石油→原子力とエネルギー源は推移しました。その過程で国内炭は消え去りました。石炭火力は環境破壊などの問題で敬遠されました。しかし、今回の原発事故で見直しが検討されているのは皮肉なものです。一度失った技術を復活するのは容易ではありません。原発事故が起こした悲惨さを考えると廃炉の気運が高まるのは自然と思います。廃炉と技術温存は対等に検討する必要があると思います。国内の原発は廃炉にする。しかし原発は輸出する。この矛盾をどう解決するか難しい問題です。中国での研修を支えたのは、日本に炭坑が現存し、技術が存在していたからです。「過去にもこの様な技術がありました。」といっても、技術者に対する説得力は弱いものです。これから日本が技術立国として生き延びるには、避けて通れない切実な問題ではないでしょうか。

三池炭鉱・閉山から 20 年

田辺　広
（大牟田市在住　70 歳）

炭鉱のある街から、炭鉱のあった街に、早 20 年たちました。
閉山に伴い、相変わらず人口減が続いています。
明るいニュースは、やはり炭鉱関連の世界遺産登録と思います。
しかし、市・県外の高い評価の割には、まちづくり等に十分に生かされていません。
市民の私たちの宝物という意識が低いと思います。
市民一人ひとりが誇りを持ち、学習し、ＰＲしていく必要があると思います。
今年は市制 100 周年なので、イベント等で世界遺産をＰＲしていく、絶好の機会と思います。
市民の積極的な参加を、期待しています。
それから、ジャー坊を市民のマスコットとして、あのくまモンに負けないくらい育てていきたいものです。
さて、三池炭鉱の明暗として、囚人労働や三川坑事故等の負の遺産もあります。
負であっても、きちんと検証、反省し、今後も忘れるべきでないと思います。
その中から、世界遺産の三池炭鉱の未来も見えてくると信じています。
世界遺産のある街から、世界遺産のあった街にならない様にしたいものです。

５．三川坑炭じん爆発事故

生還　ー生きとし生けるものをー

木下　廣人

１．最初の煙

今日は土曜日だ。明日の公休日作業の準備を詰所でしなければならないので早めに16目抜(めぬき)[2]の詰所に来た。ちょうど午後３時だった。公休日の切替工事は高圧線の模様替えで、短時間の内に工事を終える予定なので２m/mの裸銅線（バインド）や、赤色のビニールテープを巻いていた。その時、詰所の蛍光灯が消えた。「おや、これは全停電だぞ。」と言い、すぐ時計を見ると、午後の３時13分を少し回っていた。時計から目を離した瞬間、けたたましく電話が鳴りだした。

この電話は並列電話で87番の２ッベル（12目抜電気詰所）から交換を呼んでいるのである。受話器を取り上げ通話したら電気のＡ係員だった。「なんだろうか。時間は13分でしたな。」「うん、うん、そんなら、こちらの停電復旧はするから、そちらは頼む。」と言って電話を切った。Ａ係員は、交換電話を呼び出すため、幾度も幾度もベルを引いていた。長い間交換電話は出ないようだった。

私は、これはおかしい「早く昇降準備ばしろ。」と言い、昇降準備をしていたにも関わらず、交換電話は出ない。「お～い、みんな（Ｂさん（棒心[3]）・Ｃさん・Ｄさん・Ｅさん)。電話が通じないのは、只事ではないぞ、早く原因を調査しなければ、また人車が遅れるぞ。」と言いながら、私が先に詰所を出た。時計15時20分であった。すぐ他の４人も詰所の錠を締め、５～

---

[2] 坑道と坑道を連絡する短い坑道のこと
[3] 作業場の中での長

６ｍ遅れて出てきた。40～50ｍ行った所で一緒になり、いろいろ想像しながら、また炭車の脱線で、ケーブルでも切断したのだろうと話し合って 36 昇（のぼり） 材料線入口まで来た。二番方の運般の人に聞いたら、信号所の付近で特高ケーブル（11,000Ｖ）がやられたようなことを聞き、それではなおさら、大変なことだと思い、坑底に向かって進んだ。一番方の残業者や、常一番の昇降時で、その人車乗降場には、まだ 30 人～40 人ぐらいいた。

「電気屋さん、早く頼むばい。」と言う言葉を背に聞き流し、更に坑底に向かって歩いて行った。16 目抜の電気詰所より約 450ｍぐらい歩いた。時計は見なかったが 15 時 30 分頃である。更に私たちは歩き、12 目抜口まで来たが、以前として送電してこない。いろいろ不安は募るばかり。今だかつて、このように長く連絡のつかなかった停電はない。「なあーＢさん、こらやっぱり特高線が吹いて、なんでもかんでも切れとるばい。こげん長い停電はおかしかばい。」と言いながら、早足で９目抜の人車乗降場まで来た。ここもやはり昇降時で、坑道の右側や左側に思い思いに腰掛けたり立ったりして、なんだろうかと話し合っていた。９目抜を通り過ぎ、約 20～30ｍ行った所、最初の煙に遭った。薄い黄色かかった煙を見た。「こらやっぱり炭車が脱線して、エヤー管ば破ったばい。」と思いながら更に 20ｍぐらい進んだら、今度は黒色と黄色を混ぜたような濃い煙に遭い、安全灯（キャップランプ）の光も通さぬようになった。「お～い、これはただの煙ではないぞ、早く９目抜まで引返し、９目抜より排気道へ入れ。」と言って逆戻りした。

Ｄ君だけがついて来ているようで、他の３人のことを心配しながら９目抜に来た。部下のことが心配になりながらも、「お～い、みんな排気道に入れ。」と叫びながら、私が先頭になって通気門を開けて入った。９目抜付近にいた人々が、後から後からと入ってきた。「お～い、俺（おり）げんもんはおるか。」

と、少し興奮した言葉で呼んでみた。私の部下は４人ともいた。

安堵の気持ちも束の間、私は 13 卸[4]の火災のことを思い出した。とたんに心臓の高鳴るのを覚え、不安な気持ちはますます強くなってきた。みんなは騒々しくなり、慌ただしくなってきた。私は考えた『この排気道は、もう一度入気坑道を通過しなければならない。又は、急斜面になっている風橋(ふうきょう)[5]を越えなくてはならない。令片(れいかた)材料線坑道である』以上のような考えがまとまらないうちに問題にきた。

私が先頭であったが、この急斜面を昇る勇気はなく、煙のあるのを知りながら、思い切って門を開けることにした。第一、第二、第三の門を開けた。案の定、煙は廻っていた。門を出てすぐ右側の壁に、一人が倒れて「あぁ、あぁ」と呻(うめ)いていた。どうすることもできない。私の心臓は激しい動悸に変わり、足ももつれがちになってきた。目の前５～６m行けば門がある。私が先に行き、第一、第二、第三、の門を開けて入った。後から追ってきたみんなも、次々に入って終わった。排気道には既に漏れ込んだ黄色い煙が、薄黒く廻っていた。

この排気道は、主幹線排気道で、坑底に向かって風は流れ、風速も早いが、なぜか風は遅いようである。しかし、歩行者よりも先に行き、煙が段々濃くなっていくのを感じながら、煙に巻き込まれないようにと考えながら坑底に向かって歩いた。通常排気道は、人は関係者以外は通行しないので、歩行困難で水溜まり、泥土、凹凸の場所が多く、高温度と湿気があり、呼吸が困難になり、人々より遅れがちになってきた。

私は「あぁ、あぁ」と言いながら、「おいＣ君、Ｄ君いるか。」と呼んだ。Ｃ君とＤ君が近づいてきて、私の工具袋と検定灯を

---

[4] 下り勾配の坑道

[5] 入気坑道と排気坑道と交差したところで、木板か鉄板で上下に立体交差させ作った風の通る坑道のこと

持ってくれたので、いくらか歩くのに楽になった。しばらく、座り込みたい気持ちだったが、みんなに遅れる不安が増し、勇気を出し、足のもつれを引きずりながら進んでいった。

もう駄目かと幾度か思い、何度か座りかけたり、水溜まり、泥土の中を歩いているうち、右足の脚絆(きゃはん)が取れ、締め直す力はないので、手に持ってみんなの後からついていった。長い時間歩いたような気持ちがする。

みんなは止まって話し合っている。５目抜口まで来たことを知り、私は５目抜口の曲り角のパイプの内側に座り込んだ。坑底の方から来た者と一緒になり、かなり多人数の人がいたように思う。元気な者は立って何か相談していた。私は、みんなに言葉をかけようと思うが苦しく、その力さえなかった。

相談がまとまらないのか、私のところに、２、３人の採鉱係員が、５目抜の門を開けるか開けないかを相談に来た。しかし、この時、本線側より、門を漏れて黄色の煙が出ていたので、相談した結果、門を開けたら前からと後からの煙に巻き込まれてしまうから、開けないことに決定した。みんな騒々しくなり苦しみ出した。誰かが「おい、そんなら 21 卸か、宮浦連絡さん行くぞ。」と言いながら、後戻りを始めた。私自身、歩く力もなく、言葉も出ない。いよいよ俺も、ここで終わりかと思い、少し頭を持ち上げて左、右を見た。Ｂ君一人が、４～５ｍ先に立っていた。

「後ば、Ｂさん頼むばん。」と言おうとしても言葉にならず、また、頭をもたれた。座っている目の前に２～３寸ぐらいの錆びた洋釘が 10 本ぐらい落ちていたのが目に留まり、一本取り上げ、意識を失わないうちに何か書きたいと思い、アーチ枠の根元に「16 時 10 分、申し訳ない」と書き、頭を上げて左右を見たが誰一人いなかった。無論、みんな後戻りして「21 卸か宮浦連絡へ行く。」と言っていたので、そうしたと思った。寂し

さは感じなかったが、俺も終わりだと何度か思った。意識はだんだん薄らぎ、何分か何秒か生死の境をさまよったような気がする。自分でもはっきり分からない。冷たい風が顔をなでたようである。何回か呼吸をしたのだろう、意識が幾分はっきりしてきた。

「不思議だ、これはおかしい。」と思い、頭を上げた。「俺は助かるかもしれない。」と思った。幾分元気が出てきた。左手を門の方に伸ばした瞬間、手先に冷たい風が当たるのを感じた。右足を膝から伸ばし、這いだした。手と膝を交互に、５～６回、交した。やっと第一の門に近づくことができ、大きく２～３回呼吸をして門を引いた。軽く小門扇（もんせん）が開いた。第二の門が見えた。２、３回這ううちに立ち上がることができ、５、６歩、歩き、第二の門を開け、更に第三門を開けた。門を開けて、俺は助かる、きっと助かると思うと急に元気が出てきた。

本線に出た瞬間、真暗い坑道の中に無数の光が点灯している。私自身夢を見ているようで唖然となり、数秒立っていた。本線はまだ薄い煙が天井を流れていた。長い、長い煙だった。煙が通過した後の静かなことは、未だに忘れることのできない尊いもののような気がする。しかし、この無数の光は生きているのか死んでいるのか、動く気配はない。

付近の光をよく見ると死んでいるのである。この時、この無数の光が、全部死体であることを知り「可愛想に」と思い、坑底に向かうことにした。

車道の中、軌条と軌条の間、左右の壁の根元に、点々と足の踏み場もないくらい、坑道の詰[6]の方に向かって、うつぶせになって、苦しんだ様子もなく、みんなタオルを口に宛てがったり、防じんマスクを口にしたりして死んでいた。一人ひとり名前を

---

[6] 坑道の一番奥のこと

見たり、死体を数えたり、しばらく茫然として立っていた。
　気を取り直し、歩き出したが、寒さは激しくなり、足はふらつき、心臓はどきどきするし、死体の間を歩き、やっとのことで４目抜口まで来た。門の中で暖まるつもりで門を開けたらまだ薄い煙が残っていた。座りかけたが、目が回るような気がしたので、すぐ出た。
　本線の風は冷たい。寒さはどうすることもできない。ふらつく足を引ずり死体の間を歩き、中には知った者もいて、名前を見たり、顔を見たりしていくうち、一人見たようなしま模様のシャツを着ているのが目についたので、よく見ると、電気のＦ君だった。熊本の短大に通学するため、今日も早退していることを知り、常一番の１～２番人車だろうと想像した。そのまま背中に別れの挨拶をして、また、数えながらふらつく足を引ずり歩き出した。
　どのくらい、歩いたかは知らないが、坑底へ行く人車が停まっていた。人車の中でしばらく休みたいと思い、左側から、一両目に乗ろうとしたら、すぐ人車の右側に死体があった。休む気がなくなり、すぐ降りて見たら、一人は係員で帽子の名前を見たが、その時は、誰と、はっきり憶えていたが、今は、分からない。もう一人は、分からぬまま可愛想にと思い背中を叩き立ち上がり、108 人と数え、最後の 108 人目の人の名前を見ようと思ったが、工具袋に何も書いていない。若い男のようだったが、顔を引き上げて見る力はなく、立ち上がりかけたが工具袋から水筒が見えたので、水が入っているなら少し戴こうと思って引き出し、振ってみたら一滴も入っていなかった。
　何か光の動いたのを感じたので振り返って見たら、坑底の方からランプ（安全灯）の光がこちらに向かって来ているようだったので「お～い」と呼んだが返事はない。２～３回呼んでみた。目をそらした瞬間、その光は消えていた。未だに分らぬ。

錯覚だろうと思い直し、また水筒をしまい、よく見たら、鋸と斧と左官のコテが目についた。鋸と斧を借りようと思い、借りた印に自分のネーム（木下）入りの脚絆を工具袋に結んで、鋸と斧を持って坑底に向かった。さっきランプの見えたところまで３目抜来たが、誰も倒れていない。やはり目の迷いであったことを知り歩き続けた。人車を離れて、どのくらい歩いたか知らないが、24 トン電車が停止していた。運転台を見たが誰も乗っていない。電車の車体番号を見たら、№1009、№1010 の連結車であった。５トン炭車を数えながら行くうち、炭車と炭車の間から 10 昇口の捲立[7]が見えた。しばらくここで、休んでいこうと思ったが、炭車と炭車の間は、普通人間は通れないが、後戻りして炭車と壁の間を行く元気はなく、勇気を出して何両目かの間を通り抜けた。

10 昇口の奥へ行ってみたら、三建の休憩所であろう、消えた簡易保護が一ヶ目についた。何か着るものを探さねば、この寒さを耐えることはできないと思い、探し回って、やっと通気門に使うビニール布を見つけ、肩に掛けようとしたが、小さ過ぎたので首に巻きつけた。

更に探し回っているうち、布の下がっているのが目に留まった。それはズボンの破れであった。この時、初めて、腰から下が濡れているのに気付いたが、腰から下はさほど寒いと思わなかったが、上半身の寒さは身にしみた。破れズボンを両腕に差し込み前だけ風受けするようにして身につけ、しばらく休むことにした。ちょうど、壁に斜めに板が置いてあったので、足を縮め、膝を折り曲げ、寒さをこらえて休んだ。この間５～６分間休んだので幾分元気になった。坑底に行くことにし、炭車と壁の間を這うようにして炭車尻まで出てきた。

---

[7] 斜坑から水平坑道に入る部分。

１目抜の開閉所まで来て、自分があの屍の山を越えて何の恐ろしさも感じないで来たことを改めて認識した。

開閉所の砂の上に黒く炭じんがあるのに、自分の足跡だけがはっきり印がついているのが分かった。その開閉所を出て詰の方を振り返ったら、私一人だけの足跡がはっきりついていた。

次に、第一シリコン座[8]に入った。ここなら坑外から来る「コンプッサー」の空気が来ていると思い奥へ行ってみた。既にここには煙は残っていなかった。安心しながら、エヤーコックのある所を探した。行き詰りの右上の方からエヤーホースが下がっていた。ラジエーターの所まで来て、コックのついているのを見つけ、油圧ポンプのパイプの上に昇り開けようとしたが、コックが固くて開かぬので、持っていた斧で叩き開けたが、シユッとも音がしない。また元のように叩き閉じて出てきた。

もう大分足のふらふらするのも、治ってきたので、更に坑底に向かって進みながら、初めて何が原因でこんなことになったろうかと考えたが解らぬ。それとともに家のことも浮かんできた。

『俺は何も遺言もしていない。無論遺言書も書いていない。』

『俺がこのまま死んだら後はどうするんだろう？弟は何番方だったろうか』と思いながら、歩いているうち信号所まで来た。

そこにも５～６人死んでいる。誰だろうと思いよく見ると、天井を向いていたのは、電気のＧ君である。『ははー、これは電車修繕場の者ばい』と思い確かめた。『みんな修繕場の者ばい』と確かめた。みんな修繕場の者ばかり。Ｈ君、Ｉ君、Ｊ君、Ｋ君、Ｌ君ら頭を突き合せたようにして、うつぶせになって死んでいた。

---

8 坑内電車の変電所

どうすることもできない。背中を叩きながら、可愛想に・・・。

26m ばかり行くと運炭坑道口に、また２人死んでいた。小浜南のM君である。私は人車線の方には行かず、運炭坑道を通り電車修繕場の方が危険が少ないと思い、運炭坑道を進んだ。坑底電車修繕場の中に入った。何ら変わったところも見えず、ただ炭じんが黒く振りかかっているだけのようだ。後で分かったことだが、これは炭じんではなく、灰であったのだ。

更に電車修繕場を通過し、ベルト卸の人道の方へ行こうと思ったが、少し遠いので諦め、クラッシャー坑道の方へ回り、19番の配函所[9]前に出た。既にこの辺りから、どこもここも真っ黒になっている。降下材料品の上にも黒く積んでいる。まだ分からぬ、原因が。一体どこで燃えたのだろうと思っても想像さえつかぬ。

やっと坑底近くに来た。チップラー[10]と一、二坑底の分かれ口である。この分岐点の所にまた２人死んでいる。１人は伏せている、帽子を見たら、Ｎと書いてある。その横に天井を向いて大の字型になって、顔、右の頬に黒く傷があり、幾分顔も腫れている。名前が判らぬ。その一間ぐらい先に帽子が飛んでいるので、見たらＯと書いてあった。ああこれがＯしゃんたい。どうにもならん。片手で拝み（このＯ君の横に炭函（たんがん）[11]があった。そこより坑底に向かってトロリー線が落下しているので坑底の方には行かれないと思い）、火薬庫の裏側の階段のところより上がり、火薬庫の中を通り、７目抜へ行く決心をした。この火薬庫を造る時は、私の担当部内であったので、火薬取扱所の電気の配線や火薬を引き上げるホイスト（捲上機）も自分たちで据え付けたのでよく知っているところなので、階段を昇り、ホ

---

9 炭車を停めておく場所

10 石炭を運搬する炭車を横転させて石炭を下ろすための機械

11 石炭を運搬する鉄製の車。炭車のこと。

イストの横を通り抜け、火薬庫の裏口より入りこんだ。
火薬庫の中は無残なものであった。全ての書類、机、箱等が散乱し、これは火薬庫が爆発したのだろうと思ったが、しかし、火薬が爆発したのならまだまだ凄惨なものと思い直し、よく見ると、壁板や火薬の置いてある所や、箱などが、そのままのようである。
人間の死体や肉片等が一つも見当たらないので、火薬の爆発でないことを、改めて認識した。
この考えは数秒の間だった。いろんな物を踏み越えて、火薬受渡し台の上に乗り、降りようとしたら、そこに、４名の死体を見た。
その死体を乗り越えなければ出られないので、右側の方から静かに降り、すまん、すまんと片手拝みしながら一人越し、二人目を越えようようとしたら、呻き声を発した。一瞬ぎょっとした。どうしようもない。「おい、元気を出せ！」
何がどうなったか、ここまで来ても、さっぱり判らぬ。10 昇口よりここまで来る間に百幾人という多数の死体を見てきているに、まだ原因が判らぬ。また不安は気になった。幾分心臓の高鳴りも、収まっていたのにまた盛り返してきたようだ。
やっと坑底の人車乗場の入口まで来た。ここまで来ればもう大丈夫と、ふと前を見ると、いつも通行する、桟橋が落下して、天上と一坑底の捲立口が見える。足場が悪く、どうしても向側に渡ることができない。諦めて回れ右。火薬庫に逆戻りして、また死体を越えて行かねばならない。
生きた人影は一つも見えない。この荒れ果てた坑内がどこまで続くのだろう？
夢の中をさまよっているようだ。しかし、もうすぐ坑底に出られる。坑底へ出れば何か解るだろうと、それだけを期待していた。

左側の壁際をやっと通る。火薬庫の４人の死体の名前は、遂に確認することができなかった。眼鏡をかけた人が、上向きに倒れまま、まだウーウーと、呻(うめ)いていた。

火薬を揚げ降す坑道を降り、やっと船底[12]捲立まで来た。この捲立は膝上まで水溜まりがあった。その水溜まりを通過し、７目抜下、特高変電所の中間に出た。

すぐ上を見たら、７目抜付近に数個のランプがチラついている。

「これで大丈夫だ！！助かったぞ！！」

まだ鋸と斧は手にしっかりと持っていた。斧でレールを力一杯叩き、できるだけの大声を上げた。２度、３度続ける。

すぐ一人が気付いたか？降りて来る。「誰だ！！おーい誰か！！」と近づいてくる。なぜか私は相手が近づいても声が出ない。私は一生懸命答えようとするのだが。

「おー木下さん、木下さん、よかった～しっかりせんの」

私はこれを聞いた途端、足腰が立たなくなった。気が緩んだのだ。一度に気が緩み、もう一歩も歩くことができない。

「おーＰさん、Ｐさんだ（電気のＰさん)」

Ｐさんはしっかりしろと私を肩にかけてくれた。どうしても歩くことができない。とうとうへたり込んでしまった。座る場所もない。土砂が流れ込んでレールは解らないし、坑道は見る影もないような荒れ方だ。また一人降りて来た。職員のＱ氏だ。二人の肩に守られ、両方から抱えられて立ち上がり、歩き出した。緩んだ気を引き立て、両人に連れられて歩き出した途端、人の頭である。曲ったレールや枕木の間に、逆に坑底に向かって、種々様々な形で、死体が散乱していた。Ｐさんは「見るな、見るな」と言ってくれるが、見らぬ訳にはいかぬ。

---

[12] 水平坑道と斜坑をつなぐ部分で、掘り下げて低くなった部分

「あんた、よかったばん。やっぱりマラソンでもやっていたので、助かったばい」と力づけてくれた。６目抜まで行くのも大変であった。車道（レール）は曲がり、あるいは埋まり、又は道床が全て流され凸凹が甚だしく、土砂は山をなし、あるいは深い谷を作り、死体は散乱している。まるで地獄絵だ。

途中、救護隊員に会い、Ｒ君に力づけてもらった。やっと今から救護隊員が行くのか、「早く行ってくれ。まだまだ奥には、何十人という人々がいる。頼むぞ。」と言いながらやっと６目抜に着いた。

既に幾人かの負傷者は坑口へ担送したのだろうか？幾人かの担送者の救護隊が来た。坑底へ来た時までは鋸と斧は持っていた。Ｐさんが、「こげんた捨てんの。」と言って、取り上げて捨てて終わった。借りた人に気の毒な気持ちだった。

すぐ毛布を着せてくれた。寒さはいよいよ増すばかり。意識がはっきりすればするほど、寒さが増す。一枚の毛布ではどうにもならぬ。ガタガタ震えているうちに、担架が来た。救護班の人員で、誰と誰々と６名の名前が言われて、私はその人たちの担架に乗せられ、いよいよ 1,600m の 11 度８分の斜坑を担送されるのだ。すぐ目の前に人車が停止している。

担送してくれる人々に感謝の涙が出る。時計を見たら６時 10 分であった。これからが担送は大変だ。車道は枕木が、まるで梯子（はしご）のようになっている。担送者は２名充て、後になり先になり、代る代る交代で「よいさ、よいさ」と力強く一歩一歩足元を踏み締めながら時々「しっかりしろ。木下さん、大丈夫か。」と声をかけてくれる。聞き覚えのある声だが、どうしても思いだせない。寒さは増して歯の根も合わぬとはこんな状態か。すまぬ、すまぬと思いながらも返事も出ない。時々眼を開けて見ると金枠が落ちかかるようになっていたり、トロリー線は垂れ下り、顔に当たるような感じだ。どうしても原因が理解されぬ。

揚水管の破れたのは前例（ウォーターハンマリング）で分かったが、350m 坑道を通過したあの煙だ？不思議だ、不思議だと思っているうちに、坑口が近くなったことが、はっきり解った。

担送者のかけ声が一段と元気になり、エッサエッサと掛け声が勇ましく、待望の二坑口に遂に私は出た！はっきりと助かったことを改めて確認した。坑口には一杯の人だかりだ。

「誰だ？上がって来たのは？」

坑口で人員調査をしている人だろう。「電気の係員の木下さんだ。」と担送の人が２回答えてくれた。

そのまま担架に乗ったまま消防車に乗せられた。消防車のサイレンが鳴動した。すぐに走り出す。両側に並んだ消防士の２人の人が、こんなに勇ましく、頼もしく感じたことはなかった。

三川坑東門より出た。一路本院へ、サイレンは激しく鳴り、約２、３分で着いた。天領病院の旧館側の旧内科のところに降ろされた。既に何十人かの人が救出されて来ていた。大勢の看護婦さんが、右往左往していた。

すぐズボンをぬがされ、シャツはハサミで切られ、眼を洗ってくれた。私はすぐに時計を見た。７時 25 分だ。そばの看護婦さんに「Ｓさんという看護婦さんはいませんか？」と聞くと、その看護婦さんは呼びに行ってくれた。Ｓ看護婦さんは、私の部下のＢ君の奥さんである。

既に担送車に乗せ替えられ、名前を改めて聞かれた。そのまま長い長い廊下を車に乗り、耳鼻科病棟の五号室に入室。裸で寝台の上に移され、一枚の毛布を着せられ、休ませられた。

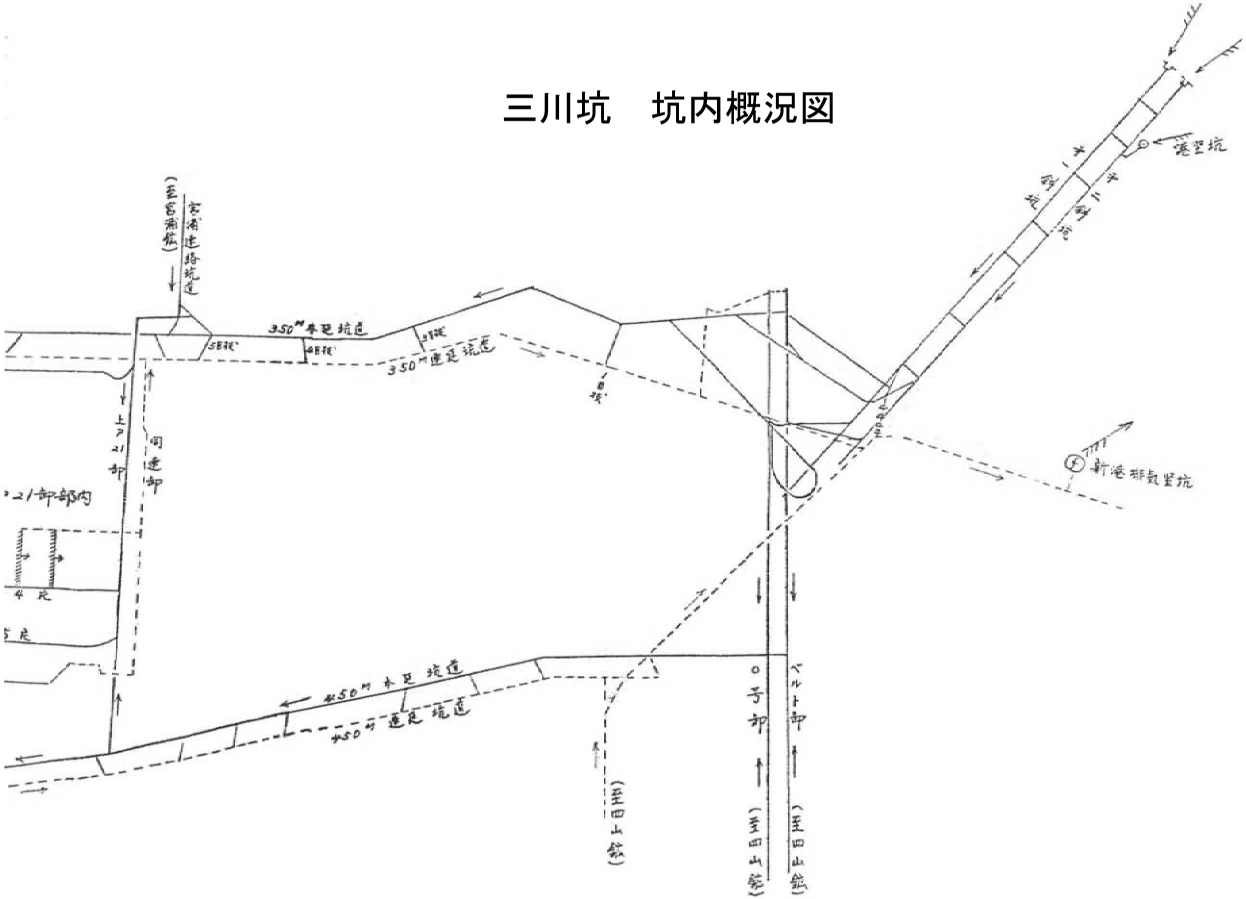
パンツ一枚だ。寒さは募る。ガタガタ震えながら寝る。すぐ湯タンポを二つも入れて暖めてくれた。やっと人心地がついてみると、午後８時 05 分だった。後から、後から負傷者が送られてきて、この部屋も、私一人だったベッドも、すぐ足りなくなり、遂に床（土）間ベッドが急造された。にわか造りのベッ

ドだ。そこにＢ君の奥さんが見えた「よかったですね。」と言葉をかけてくれた時、何と言ってよいか、言葉が出なかった。
「350m坑道５目抜で、姿を見失ってしまったので、助かったのやら、死んでしまったのやら、さっぱり分からない。ただし、まだ力を落さずがんばってください。」と言うより外に道はなかった。
多忙な看護婦さんだ。長話もできない。すぐに出て行かれた。Ｂ君外３人の者の無事を祈った。
やっと家族が来た。生きていたことを喜び、涙が止めどもなく湧き出てきた。
ただし、まだ不安は残る。後はどうなっただろう。
その人たちや私の連れは、部下は？私より先に出た者はない。あの真っ黒な煙の中に巻き込まれ、苦しんでいる者もいるだろう。それらの人々の無事を祈るのみ。

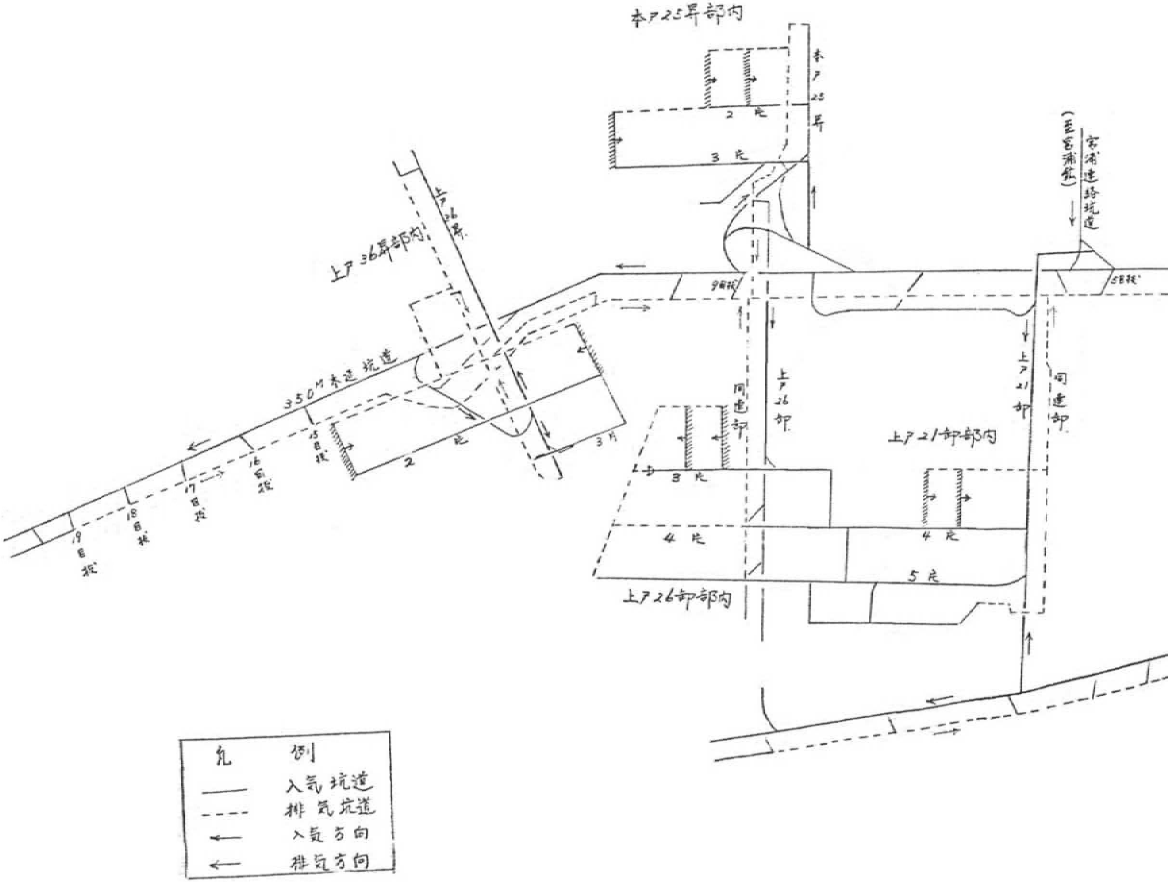
昭和 38 年 11 月 21 日　記（退院後自宅床の中で書す）

結果
死亡　Ｂさん　生存　Ｃさん、Ｄさん、Ｅさん

三川坑　坑内概況図



次ページへ


本ア25昇部内
本ア25昇
2尺
3尺
上ア36昇部内
上ア36昇
350尺本道坑道
9目尺
18目尺
17目尺
16目尺
15目尺
2尺
3尺
9目尺
5目尺
(至宮浦鉱)
宮浦連絡坑道
上ア26卸
同連卸
上ア21卸部内
上ア21卸
同連卸
3尺
4尺
4尺
5尺
上ア26卸部内
凡例
入気坑道
排気坑道
入気方向
排気方向

前ページへ

炭鉱の思い出インタビュー

～「三池炭訪」より～

炭鉱労働者の生活や三池炭鉱の歴史を学ぶため、福岡県は「三池炭訪」というアプリを平成27年に作成されました。
以下では、そのアプリに収録されている三川坑の炭鉱労働者と炭鉱労働者の妻の当時の様子や生活ぶりについて、３名の方のインタビュー内容を紹介します。

炭鉱で生まれた熱い絆

磯浜　徹
（大牟田市在住　70歳）

過酷な仕事場で炭坑夫が抱いていた想いとは

炭を出さんと日本の経済は良くならないと思ってがんばってきたばってんですね。炭鉱夫はみんな、日本のためにという想いはあったんでしょうね。家族のため、会社のため、日本のためにがんばってきたと思いますよ。みんなそういう考えは持っていたと思います。

坑内で結ばれた固い絆

仕事の時は、お互いに苦しい時もあった。仲間たちと困ったときは助け合ったり、誰かが仕事で失敗したときはみんなでカバーしたりして、お互い助け合ってやってきた。「絆」はあるよね。その「絆」が今、当時の仲間との旅行につながっているのかなと思う。苦しかったこともあるし、お互い助けられてきたことで、旅行するきっかけができたんじゃないかな。旅行する時も、当時の仕事の話をよくするけどね。

炭鉱夫の誇りと喜び

堀内　基
（大牟田市在住　72 歳）

三川坑で働くこととは

三川坑に入ったというのは誇りだった。当時、一番の出炭量も誇っていましたしね。毎日会社に出てくると出炭量のトン数が掲示に出ていたんです。それを見るのが楽しかったですね。採炭や掘進には従事していなかったけど。（堀内さんは当時、保線工として炭車のレールの溶接作業などに従事していた）会社に来て、「昨日は（石炭が）どのくらい出とる」、「今日はどのくらい出るかなあ」と思えるのが誇らしかったですね。

３２年間の炭鉱夫人生　過酷さの中にあった喜び

32 年間というのは早かったですね。仕事も過酷だった。生活は、いつも寝てるか坑内でしょ。坑内から上がってきた時が一番嬉しかった。坑内から上がってくると「ホッ」としていた。家庭生活での喜びは、一軒家を建てたことですかね。あれが、一番嬉しかったですね。自分の力で建てたということが。以前は借家に住んでいたんでね。土地から全部買って、家を建てて、それが誇りでもあるし、私にとっては嬉しいことですね。

心遣いと、楽しみと

井上美枝子
（荒尾市在住　67 歳）

危険な仕事へ向かう夫を支える妻として
夫を送り出す気持ちは。そして、心がけていたこととは

やっぱり、明日は元気で帰ってきてくれるかが、一番心配でしたね。坑内は、いつどんな事故が起こるか分かりませんからね。毎日、元気で帰ってきてほしいという気持ちで送っていましたね。朝から送るときは、笑顔で送るようにしていました。どんなにけんかをしていても（笑）。危険な仕事ですからね。怒らせて行かせたら危ないので、それだけは気をつけていましたね。

当時と今、大牟田の町や生活を振り返って

そうですね、町の雰囲気は全然変わりましたね。賑やかだったし、デパートもいろいろあったし。それで、私たちも給料をもらいに行ってたんですよ。会社に直接。それをもらったら、月に１回、デパートとかに行くのが楽しみだったんです。

第３部　三池炭鉱の歴史を未来へ

－子どもたちが見た近代化産業遺産－

大牟田市では、市内小学６年生を対象に近代化産業遺産バス見学会を平成 25 年度から行っています。この見学会は、子どもたちが市内に残る近代化産業遺産に触れることで、まちの発展の歴史や先人の偉業などを学ぶことを目的に実施しているもので、見学会終了後に、多くの感想が寄せられています。子どもたちの感想コメントには、まちに対する愛着や誇りといった様々な想いが綴られています。

ここでは、その中の一部を紹介します。

・今までネットやパンフレットなどの資料でしか調べず、詳しくは知りませんでした。ですが、ガイドさんたちの説明を聞いていると「こんな場所だったんだ」と思うだけでなく、「このようなことをしていたんじゃないのかな」と考察するようになりました。他の方々からも聞いてより詳しく知り、それを大牟田の遺産について知りたいと思う人に説明できるようになりたいです。（みなと小）

・今日の見学会で学校で調べたことの詳しいことや初めて知ったことがありました。自分が住んでいる所にはいろんな歴史があることをいろんな人に伝えたいなと思いました。そして今日知ったこと・学んだことを活かして大牟田に住んでいきたいし、少しでも多くの人に大牟田のこと、世界遺産のことを伝えることができればいいなと思いました。（みなと小）

・今回行った中で一番身近にあった三池港の知らなかったことや旧長崎税関支署や万田坑のことが知れてよかったです。これからの授業で今回知ったことを活かして、勉強していき、今後生きていく中で今回言われたように大牟田市出身と誇りを持って言えるように大牟田市をよくしていきたいです。（みなと小）

・今日、見学に行って、三池港から万田坑までつながっていることを初めて知ってびっくりしました。三池港の閘門は斜めに閉めて、工夫していることが分かりました。税関支署では当時のいろいろな物が残っていてすごいと思いました。世界の宝になる物が大牟田にあるから、大人になったときでも世界に伝えていき、もっと広めていきたいです。この見学を通していろいろな物が残っていたし、昔の人々はすごい苦労を

していると思いました。（みなと小）

・僕は見学会をして大牟田は石炭発祥の地だったのは知っていたけど、宮原坑では囚人労働させられて、きつすぎて、修羅坑と呼ばれていたことを初めて知りました。他のこともよく知れました。とても勉強になったのでよかったです。（天領小）

・案内の人のおかげで、改めて大牟田のすばらしさを学べました。これからも僕たちで守っていきたいです。ありがとうございました。（天領小）

・自分は 10 年以上大牟田にいるけど、町のことをよく知らなくて、この見学があったからよく知らなかったことをめっちゃよく知れました。驚いたことがたくさんありました。（天領小）

・前まではあまり興味がなかったけれど、見学をしてみて、気になるところや知って楽しかったこと、おもしろかったことがあってよかったです。これからも少しずつ世界遺産のことを調べたいです。（駛馬南小）

・ずっと前から宮原坑にはエレベーターがあったなんていうことが知れたのでよかったです。石炭産業科学館にあった石炭を見てすごく大きかったのでびっくりしました。三池港のことをハミングバードと言っていることを知れたのでよかったです。宮原坑は家から近いので、家族を連れて行きたいと思いました。（駛馬南小）

・とても分かりやすく、石炭を触ったりして楽しかったです。知らなかったことも知れたのでよかったです。近代化産業遺産の見学をして、何のために作られたのか、使われていたのか、などが分かったのでよかったです。見学会はとても楽しかったです。ありがとうございました。（駅馬南小）

・この見学会を通してたくさんの新しいことが分かりました。私自身、おじいちゃんが働いていたので少しお話を聞いていましたが、詳しいことも分かったのでよかったです。特にびっくりしたことは、地下に松の木が使われていたなど（※腐りにくいから）。万田坑には山ノ神がまつられていたなど教えてくださり、ありがとうございました！（駅馬北小）

・ボランティアガイドをしていて私たちはよく知っていると思ったのですが、ガイドさんの話を聞いているといろいろなことが分かりました。例えば炭鉱の様子、三池港の造り方などを学べました。教えてくださる方々が楽しく盛り上げてくださったおかげで、私たちもとても楽しかったです。修学旅行もいろいろ学び、楽しみたいです。今日はありがとうございました。（駅馬北小）

・全部知っていたと思っていたけど、まだまだ知らないことがたくさんありました。だから宮原坑のガイドでも活かせるよう三池炭鉱の流れを調べたり考えたりしたいと思いました。また、説明の内容が分かりやすくて三池炭鉱の流れが分かりました。だからこれをガイドに活かしていきたいです。（駅馬北小）

・説明がとっても分かりやすくて、見学しながらよく学ぶこと

ができました。ありがとうございました。私は今日の見学で三池港に興味を持ちました。三池港はそんなに遠くないので、家族と一緒に行って学んだことを教えてあげたいなと思いました。（天の原小）

・今日、三池港、旧長崎税関三池税関支署、万田坑に行ってみて、いつからいつまで使われていたのかや、何のために作られたのかが分かりました。他の近代化産業遺産も見てみたいと思いました。（天の原小）

・見学会を終えて、私は今までたくさん知らなかったことや、どんな目的で作ったかなどがよく聞いたり、見たりできたのでよかったです。このことを３・４年生に分かりやすく伝えられるようにしたいです。いろんなことが知れてよかったです。（天の原小）

・中国と日本の石炭の違い、團琢磨さんがどんなことをされたのか、長崎税関では昔のままのガラスを使い続けていることが分かりました。大牟田はすごい町なんだと思いました。（玉川小）

・石炭は斜めに埋まっていることを知れて、びっくりしました。旧長崎税関では、昔の窓ガラスを見つけることができてよかったし、楽しかったです。大牟田の宝物を見つけることができて、よかったです。（玉川小）

・三池港の建物の歴史や團琢磨さんの知識をしっかり知れたし、昔の人々の働き方や夢、苦労が知れたので、よかったです。自分たちだけでも三池港のすごさを知り、大牟田の皆さん以

外でも大牟田の歴史やすごさを知らせていきたいと思っています。やっぱり大牟田はすごいなと思いました。（玉川小）

・三つの施設の特徴、目的、工夫などを聞いたり見たりして、知っていたこともあったけど、それより知らないことがたくさんあって、まだ大牟田のことを知れていないなと思った。またいろいろ調べて、もっと大牟田のことを知って、いろんな人に教えたりしたい。ありがとうございました。（大牟田中央小）

・ただ言葉で知るだけではなく〇〇とはどういう意味なのかや、どんな役割をしてどんな目的でつくったのかがしっかり分かったから本当によかったと思いました。しっかり勉強になったのでよかったです。本当にありがとうございました。新聞作りなども、がんばります。（大牟田中央小）

・今までに知らなかったことを詳しく知れたのでよかったです。目で見たり、触ったりしてもっと詳しく知ることができたのでよかったです。こんなにいい歴史に残るものがあることがとても嬉しいです。もっと大牟田について調べたいと思いました。（大牟田中央小）

・いろいろな世界遺産を見て今までより更に分かりやすくガイドさんの説明がよかったので、楽しかったりいろいろ経験できたのでよかったです。家族のみんなで行く時にみんなはまだあまり知らないと思うので、昨日学んだことを家族と行くときに説明できるようにがんばりたいと思います。家族だけに知らせるんではなく、おばあちゃんやおじいちゃんにも上手に伝えるようにしたいです。昨日は本当に楽しかったし、

難しい所もあったけど経験できたのでよかったです。（大正小）

・自分が知っていることより、とても多くのことを知ることができて楽しかったです。DVDやガイドさんの説明が分かりやすくて勉強になりました。専用鉄道敷跡もとても長くてびっくりしました。作るのにどれほどの時間や費用がかかったのだろうかと思いました。今の海の色を見て、炭坑があった頃はどのような色だったのだろうと思いました。（大正小）

・楽しく分かりやすく教えていただいてありがとうございます。僕は今日学んだことをこれからの生活や修学旅行、勉強につなげていき、これからできるだけ多くの人に一歩ずつ伝えていってみようかなと思います。僕たちも大牟田についてしっかり勉強しますので、市役所の方たちもがんばってください。今日は本当にありがとうございました。（大正小）

・近代化遺産には、昔の人たちの一生懸命な思いや、優しい気持ちがたくさん込められていて、自分も昔に行ったような気がして、とても楽しかった。昔の大牟田と今の大牟田を比べると、昔の人たちの苦労が分かりました。（中友小）

・私が知らなかった近代化遺産のもっと詳しいことを知れて、もっと大牟田のことを知ることができてよかったです。今日の見学会で、教えてもらったことを活かし、子ども大牟田検定では、博士になりたいです。私は、石炭産業科学館で、炭坑でどのような機械を使っていたのかをもっと詳しく知りたいと思いました。大牟田は、近代化遺産がたくさんあって、すごい町だなあと思いました。（中友小）

・いろいろな場所に行って、なんでこれがあるかや疑問などが分かってよかったです。もっと石炭や大牟田の歴史に関わってみたいです。自分の町のことが知れてよかったです。（中友小）

・行ったことのある所でも、前自分で見ただけの所もあったけど、ガイドさんがよく説明をしていただいたので、よく知ることができました。あと、展示されている物の意味を改めて知ることができたのでよかったです。もっと遺産のことを知りたいと思いました。（明治小）

・パンフレットとかには載ってない貴重なことを聞けてよかった！大牟田は世界にも通用するようなものがあって、そんな町で育った私たちは幸せと改めて思った！（明治小）

・たくさんの大牟田の宝があるところに行けて、たくさんの歴史があったと思いました。僕は大牟田の宝が世界の宝になっているから、これからは誰かが守ってくれるだろうではなく、自分たちでこれからの世界の宝を守り続けて、もっと大牟田のことを知ってもらえるようにがんばります。（明治小）

・見学をして、知らなかったことがたくさん分かったし、実際に見てみるととても大きくて、とても勉強になりました。私は「大牟田にはこんなにすごい物があるんだな」と思いました。今度、家族と行って、もっともっと大牟田のことを知りたいです。（白川小）

・長崎税関では、当時の様子がそのまま残っているところもあ

り、一部の空間だけ、昔に来たみたいで、ワクワクしました。大牟田に生まれたからこそ知れたこともあるので、もっと大牟田が好きになりました。あまり体験できないこともたくさん体験したので、大牟田を詳しく知りたいと思いました。（白川小）

・自分の住んでいる大牟田市に名前は知っていても、中身は知れずの世界遺産があり、だけどこの機会にその世界遺産がどれくらいの歴史を持っているかが分かり、他の世界遺産を調べたくなりました。見学会をして歴史が分かり、役割も分かって、とてもよかったと思います。（白川小）

・僕はこの見学会で思ったことは全部で三つあります。一つ目は三池港のことです。１万トン級の船が三隻も泊めることができるのがすごいと思いました。二つ目は宮原坑です。石炭を掘り出す役割だけではないことが分かりました。三つ目は大牟田の世界遺産についてです。僕たちは大牟田市民なので、世界遺産が大牟田にたくさんあることを誇りに持って生きたいです。（平原小）

・とってもアナウンスとか解説とか分かりやすくて、聞いててとってもよかったです。あと、結構楽しくてよかったです。楽しく学べてよかったです。大牟田の世界遺産のことをこの授業でたくさん知れたのでよかったです。家に帰ったらぜひ親にも教えてあげたいです。本当に楽しかったです。（平原小）

・石炭のことや三池港や宮原坑について知れてよかったです。いろいろな歴史などを教えてもらって、大牟田にはいろいろ

な歴史があることが分かってよかったです。これからも大牟田の宝を大切にしていきたいです。（平原小）

・大牟田の歴史にすごく興味を持ち、他のものの歴史についても知りたくなりました。また、見学した所についてもっと詳しいことがあったら調べたいと思ったし、そんなすごい所に生まれてきたんだなぁと思って、なんだか嬉しかったし、びっくりしました。（高取小）

・私は前にも石炭産業科学館や三池港、宮原坑に行ったことがあります。だけどその時より、興味を持って学習できたし、行ったことのない場所でも楽しく学ぶことができました。大牟田市の宝が世界の宝になったことを誇りに思います！！（高取小）

・見学会を引っ張っていってくださった、ガイドさんの話が分かりやすくて、疑問に思っていた所もすぐに分かって楽しかったです。宮原坑の巻揚機室ではちょっとクレヨンのような独特なにおいがしました。また漢字も違う字が使われていたのでびっくりしました。家族みんなに話したら「すごいね。」、「今度行ってみたいね。」と言われたので家族で行こうと思いました。（高取小）

・教科書に載っていた建物とかがあってすごかった。昔の乗り物や建物がいっぱいあって楽しかった。教科書を見て分からなかった所が、今日行ってみてよく分かった。大牟田のことをみんなに自慢したいです。（三池小）
・宮原坑のイギリス製の赤レンガのつくりやエレベーター（ケージ）で下に行って石炭を掘ることなどが分かって、これか

らも調べたいと思いました。あと、石炭産業科学館はとっても楽しかったです。石炭は意外と軽かったり、見に行かなきゃ分からないことがよく知れてよかったです。（三池小）

・大牟田の世界遺産についてあまり知らなかったけれど、実物を見て説明を聞いて、知ることができたので、よい経験になったと思います。これからは、私が情報を伝える側になりたいと思います。（三池小）

・改めて大牟田は、近代化遺産などがとても多くて、発展している町なんだなと思いました。これからも大牟田のことを知ってもらうためにＰＲしていきたいです。（羽山台小）

・宮原坑は写真では何十回も見たことがあったけど、実際に見ると、とても大きかったです。いろんなものを見たり、触ったりしてたので、宮原坑に興味を持ったんだと思います。途中いろいろな機械や装置があったので、それがどのようなことに使われているのか正式に知りたいと思いました。世界遺産についてもっと知りたいです。（羽山台小）

・私は今日習ったことで、すごいことがこんなにあって、そのすごいのは私たちと同じ人間がつくり、昔はこんなにすごい知識があり、私が知らないことが、今日３時間でこんなにすごいことがいっぱい知れて嬉しくて、また行きたいな～と思いました。（羽山台小）

・大牟田の近代化遺産を見て、昔の人がいろんな工夫をしていたり、どんな役割をしているのかが分かってすごいなと思いました。三池港や宮原坑などはつながりがあったことは初め

て知ったのでお父さんやお母さんに伝えたいです。（銀水小）

・ガイドの方がおもしろく、詳しく教えてくださったので、僕も大牟田の世界遺産や近代化遺産のことがよく分かりました。そして昔の大牟田の町のことがよく分かりました。今後は僕たちが大牟田の町のことを教えていきたいです。（銀水小）

・それぞれの施設はとっても昔の人が使っていたので、それを私たちが守っていきたいと思います。昔の人の考え、知識はとってもすごいと思いました。これからもいろいろな施設を私たちが守っていきたいと思います。初めて見たことが多かったので、とても感激しました。（銀水小）

・見学を通して、三池港や宮原坑、万田坑などは知っていたけど、その場所が、どれだけすごいことかが分かって、とても嬉しかったです。このことを忘れないようにしたいです。（上内小）

・世界遺産見学で石炭を掘ることのすごさや、恐ろしさがよく分かりました。私はガイドさんの話で「毎日無事に帰ってきたらとてもすごいこと」と言われたので、私はとてもびっくりしました。（上内小）

・私は三池港、宮原坑、万田坑に初めて行ったので、「あんな風なんだな。」、「中はあんな感じなんだ。」と思いました。また行って、もっと調べてみたいと思いました。（上内小）

・馬が坑内に１回入ったら出られないというのに、僕はゾッと

しましたが、その石炭を使って少しずつ一歩一歩進化していく人間はすごいと思ったし、石炭はあんだけ掘ってもまだまだ眠っているということにも僕は驚きました。（吉野小）

・私はこの見学を通して、自分が知らなかった石炭や宮原坑の歴史・三池港の歴史などを改めて理解し、自分たちの暮らしにも役立っているのが分かったのでよかったです。また今知ったことをまだ知らない人々に教えていって、昔の歴史をいろいろな人たちに広めていきたいです。（吉野小）

・今まで大牟田のことについて知らず、あまり世界遺産に興味がなかったけど、ガイドさんが言われたことを書いてしっかり学ぼうと努力し、理解できました。ガイドさんや石炭産業科学館のスタッフの人に感謝し、このことをいろんな人に伝え、興味を持ってもらいたいと思います。（吉野小）

・石炭を掘るためには、ものすごい機械や水、お金がいることや設備などが必要だったんだなということが分かった。そして何人もの人が犠牲になって掘ったんだなと思いました。その人たちがいたから、今の暮らしがあるんだなと勉強になった。（倉永小）

・世界遺産（大牟田）が、どのような理由でなったのかが、説明でよく分かった。昔の人たちがどう苦労して、今の大牟田にしていったかが、すごく伝わった。これから建造物などを大切にしたいと思った。今日は楽しかったし、勉強になった。（倉永小）

・感想は、どの場所を見学しても、團琢磨さんがいたことにび

っくりしました。ガイドさんも分かりやすく説明してくださったので、大牟田のことがよく分かりました。（倉永小）

・大牟田に住んでいるけど初めていろいろなことを知りました。ガイドさんの話で、知らなかったことを教えてくれたり、「昔はここに～があったんだよ」と教えてくれて「へ～」と思って、初めて「世界遺産になるわけだ。」と感じました。手で触ったり、匂いをかいだりしてよく分かりました。とっても分かりやすい言葉で教えてくださったので、よく分かりました。（手鎌小）

・昔は160m地下まで行って、作業をしていた所がすごかったです。施設の役割とつながり、世界遺産を五感で感じることができたので、よかったです。この近代化遺産を通して僕は大牟田のことが好きになれたのでよかったです。三池港は團琢磨が作ったことが分かりました。（手鎌小）

・大牟田がどのようにして石炭を発見して、石炭で大牟田が発展していったかや、世界遺産がなぜ作られて、どのようなことをしていたのかなど、大牟田に住んでいても分からないようなことをたくさん知れてよかったです。これからも世界遺産を大切に未来へと残していけるといいと思います。（手鎌小）

資料編

三池炭鉱概要

斜坑口
斜坑 (搬炭または人員昇降に使用された坑口)
(換気や排水にのみ使用された坑口)
立坑口 (搬炭または人員昇降に使用された坑口)
(換気や排水にのみ使用された坑口)
(1907-1925) (操業年)

主要坑道：坑内をほぼ水平に走り、深度を示す名称が付けられる。
※単純には坑口から1/200～1/250の緩り勾配
斜坑 ～ 閉山時に使用されていなかった坑道
名称 主な炭鉱社宅：いずれも現存していません。
関連の事業所など

専用の鉄道が、炭鉱の坑口や、石炭を積み出す港、石炭を使う工場や社宅を結び付けていたんだね。

陸から海底に向かい、石炭を掘り進んでいったんだね。

⑨有明坑跡
最後に開発された坑口
2本の立坑櫓が現存
（敷地外から見学可能）

⑧三川坑跡
戦後の中心的な坑口
斜坑口、巻上機室など現存
（見学不可）

⑦四山坑跡
港沖立坑に一部施設が現存
（見学不可）

⑥万田坑跡
国指定史跡・重要文化財
坑口施設が数多く現存
（常時一般公開中）

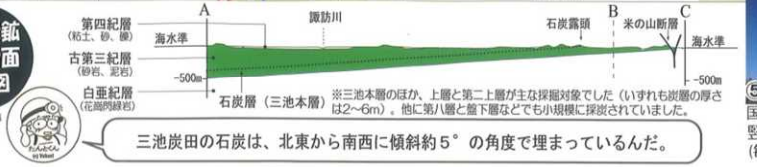
①大浦坑跡
三池炭鉱最初の近代炭坑
現存施設なし

②七浦坑跡
官営時代の建物が現存
（見学不可）

③宮浦坑跡
国登録文化財（煙突）
三池で最長の歴史を誇る
三池のレンガ煙突はここだけ

④勝立坑跡
デービーポンプで名高い
立坑櫓の基礎のみ現存

⑤宮原坑跡
国指定史跡・重要文化財
竪坑櫓は国内現存最古
（毎月第三土曜定期公開）



三池炭田の石炭は、北東から南西に傾斜約5°の角度で埋まっているんだ。

三池炭鉱における出炭量の累計は、約2億9千万トン。国内生産の約1割を担いました。

三池炭鉱 坑口別出炭量・従業者数、全国出炭量の推移

三池炭鉱出炭量（万トン）　従業者数（人）　全国出炭量（万トン）

参考：『大牟田地域の地質』、『福岡県史 三池鉱山年報』、『三井鉱山五十年史稿』、『大牟田市統計年鑑』、『石炭鉱業合理化政策史』

S40(1965)年 四山鉱の坑口を港沖に移転
S38(1963)年 三川鉱炭塵爆発事故
S36(1961)年 石油輸入自由化。エネルギー転換進む
S35(1960)年 三池争議
S28(1953)年 四山鉱の揚炭を三川坑に統合、128日間のスト
S22(1947)年 最大の従業者数 25,588人
S20(1945)年 終戦
S15(1940)年 万田坑最大出炭113万トン 宮浦坑戦前最大出炭156万トン
S44(1969)年 宮浦鉱坑口を三川に移転 三川鉱最大出炭278万トン
S45(1970)年 三池炭鉱最大出炭657万トン
S52(1977)年 宮浦鉱を三川鉱に統合 有明鉱設置
S62(1987)年 四山坑と三川坑を統合し第一鉱に、有明鉱を第二鉱に
H1(1989)年 第一鉱と第二鉱を三池鉱に統合
H9(1997)年 三池炭鉱閉山
全国出炭量（右目盛）
S6(1931)年 満州事変
S4(1929)年 世界恐慌
T12(1923)年 四山坑出炭開始、宮浦大斜坑開坑
T3(1914)年～T7(1918)年 第1次世界大戦
M41(1908)年 三池港開港
M37(1904)年 日露戦争
M22(1889)年 三井への払下
M6(1873) 三池炭鉱の官営化
従業者数（右目盛）
露頭坑 大浦坑
七浦坑
大浦坑
宮浦坑
宮原坑
勝立坑
大浦坑
宮浦坑
万田坑
宮浦坑
万田坑
四山坑
宮浦坑
（宮浦鉱）
万田坑
三川坑
（三川鉱）
四山坑
（四山鉱）
宮浦鉱
三川鉱
有明鉱
（四山鉱）
（三池鉱）

年度：八七三（明治6）年、八八〇（明治13）年、八九〇（明治23）年、九〇〇（明治33）年、九一〇（明治43）年、九二〇（大正9）年、九三〇（昭和5）年、九四〇（昭和15）年、九五〇（昭和25）年、九六〇（昭和35）年、九七〇（昭和45）年、九八〇（昭和55）年、九九〇（平成2）年、九九六（平成8）年

明治6年三池炭鉱官営化　明治22年三井の経営に　明治41年三池港開港　昭和初期石炭化学コンビナート形成　昭和24年昭和天皇入坑　昭和35年三池争議　昭和41年日産2万トン達成　昭和51年有明坑操業開始

写真提供：大牟田市石炭産業科学館

三池炭鉱 坑口別 操業時期の推移

①大浦坑：M6(1873).7 廃坑だった旧斜坑再開　M9(1876).9.12 第一新斜坑起工　M11(1878).8 第一新斜坑操業開始　M38(1905) 第二斜坑起工　M40(1907).4.11 第二斜坑操業開始　T15(1926).2.9 閉坑式　S21(1946).2.10再開坑　S31(1956).1.7廃坑式

②七浦坑：M12(1879) 第一立坑起工　M16(1883) 第一立坑操業開始、第二立坑竣工　T12(1923).2揚炭を宮原坑に集約　S6(1931).5.1閉坑

③宮浦坑：M20(1887)第一立坑起工・着炭　T9(1920)第二立坑操業開始　M21(1888)第一立坑操業開始　T13(1924).9.12大斜坑揚炭開始　S5(1930) 第一立坑揚炭中止　S26(1951) 第二立坑閉坑　S44(1969).1.4 宮浦鉱の坑口を三川坑に移転

④勝立坑：M18(1885) 第一立坑起工　M26(1893) 開削再開　M28(1895) 第一立坑操業開始　M29(1896) 第二立坑操業開始　S3(1928) 閉坑式　S24(1949).4.1 再開坑　S25(1950).12.16 廃坑　H10(1998)国登録文化財

⑤宮原坑：M22(1889)水没　M28(1895)第一立坑起工　M32(1899)第二立坑起工　M34(1901)第二立坑操業開始　S6(1931).5.1 閉坑　H12(2000)国指定史跡　H10(1998)国指定重要文化財

⑥万田坑：M31(1898)第一立坑操業開始　M30(1897)第一立坑起工　M35(1902).11.27第一立坑操業開始　M42(1909)第二立坑操業開始　S26(1951).9.1 三川鉱に統合　H12(2000)国指定史跡　H10(1998)国指定重要文化財

⑦四山坑：M31(1898)第二立坑起工　M35(1902)第一立坑着炭　M37(1904)第二立坑着炭　T7(1918)第一立坑起工　T9(1920)第一立坑着炭　T11(1922)第二立坑起工　T12(1923).3 第一立坑操業開始　T14(1925).3 第二立坑操業開始　S28(1953) 揚炭を三川鉱に統合　S40(1965).8 港沖立坑に四山鉱の坑口移転　H8(1996).9立坑櫓解体

(新四山坑)：S34(1959) 港沖立坑賃通　S29(1954) 港沖立坑着工　S62(1987)三川鉱に統合

⑧三川坑：S12(1937).3起工　S15(1940).10.13竣工　S52(1977).5.6宮浦鉱を三川鉱に統合　S62(1987) 第一鉱に改称

⑨有明坑：S33(1958)日鉄鉱業が起工　S49(1974)着炭　S48(1973)4.1開発再開　S47(1972)有明炭鉱設立　S42(1967)開発中断　S51(1976)有明炭鉱操業開始　S52(1977)揚炭を三川坑に集約、有明鉱に改称　S62(1987)第二鉱に改称　S62(1987) 第一鉱第二鉱を三池鉱に統合

三池鉱　H9(2007).3.30 閉山

参考：『三井鉱山五十年史稿』、『三池炭の黎明概観』、『男たちの世紀』

時代によって、中心的な坑口は変化してきたんだね。

制作：大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ 三池炭鉱掘り出し隊

(2012.3.10000)

①大浦坑

所在：大牟田市大浦町
M11(1878)年新斜坑操業開始、T15(1926)年閉坑、S21(1946)年再開坑、S31(1956)年廃坑

今は最終処分場の敷地内のため、見学は困難ですが、擁壁の右下に封鎖された坑口跡が確認できます。

大浦坑は三池炭鉱で最初の近代炭鉱です。江戸時代の炭坑が石炭露頭から炭層に沿って掘り進められたのに対し、幕末に開かれた大浦坑では、地表から炭層に短絡して直接向かう岩石坑道が掘られました。

一度、出水により廃坑となっていたのですが、官営化された明治６(1873)年に再開坑されます。さらに明治11(1878)年3月には新たな斜坑が完成しました。このとき国内では初めての斜坑巻上機が使用されるとともに、旧坑を活用した火炉による排気がおこなわれ、出炭量の増加が見られました。

②七浦坑

所在：大牟田市吉成町
M16(1883)年操業開始、S6(1931)年閉坑

工場敷地内のため立入れませんが、旧巻上機室が現存しています。これは数少ない官営三池炭鉱時代の遺構です。

七浦坑は官営三池炭鉱によって大浦坑に次いで開坑されました。明治政府によって近代設備が多彩に取り入れられた、模範炭鉱でした。明治14(1881)年には、七浦坑からの出炭量は、全国の15%以上を占めるほどでした。

排水と排気を主目的とした第二立坑にはギーバル式蒸気扇風機が設置されましたが、これは国内最初の動力扇風機でした。また選炭場では、トロンメル式回転篩によって塊粉選別が行われましたが、国内では初めての機械選炭でした。

③宮浦坑

所在：大牟田市西宮浦町132-8
M21(1888)年操業開始、S44(1969)年三川坑に坑口移転

敷地の一部が公園として整備され、赤レンガ煙突と、大斜坑の坑口跡・プラットホームが保存されています。

宮浦坑からは三池炭鉱で最も長い期間、80年以上にわたって出炭されました。

当初は七浦坑の空気流通と採炭予備のために立坑が開鑿され、明治21(1888)年4月から操業が開始されました。

炭層に沿って採掘を進めていたところ、北西方向で大きな断層に突き当たりました。しかし調査したところ、断層の先にも石炭層があることが確認されたのです。そこで大正12(1923)年にはこの新しい区域に直接通じる大斜坑が開鑿され、万田坑、四山坑に並ぶ主力坑として再生しました。

④勝立坑

所在：大牟田市勝立町
M28(1895)年操業開始、S3(1928)年閉坑、S24(1949)年再開坑、S25(1950)年閉坑

現在は第二立坑櫓の基礎が残るだけです。またコンクリートの壁面にはアーチ状の開口部の跡が残っています。

勝立坑は、当時世界最大のデビーポンプによって再生したことでよく知られています。官営三池炭鉱三番目の近代炭坑として開発されますが、工事開始以来湧水に悩まされます。

明治22(1889)の三井への払い下げ直後におきた大地震で、とうとう工事中の竪坑は水没します。出水のあまりの多さに、三池炭鉱の経営そのものも疑問視されました。

しかし当時三池炭礦社事務長の團琢磨はデビーポンプを採用し、明治27(1894)年には着炭にこぎつけることができました。

⑤宮原坑

所在：大牟田市宮原町1-86-3
M31(1898)年操業開始、S6(1931)年閉坑

鋼鉄製の立坑櫓とレンガ造の巻上機室などが保存されており、毎月第三土曜日は施設が一般公開されています。

宮原坑は払い下げ後に初めて三井が企画開発した坑口です。

七浦坑など既存坑内の排水問題を解決するために開鑿されました。排水が重視されていたため、第一竪坑、第二竪坑共に、勝立坑でも活躍したデビーポンプが２台ずつ設置されました。鋼鉄製の立坑櫓は国内で現存する最古のものです。

宮原坑は囚人労働に支えられていたことでも知られています。現三池工業高校の敷地にあった三池集治監の囚人も、看守の監視・指示のもと作業に従事していたのです。

⑥万田坑

所在：荒尾市原万田
M35(1902)年操業開始、S26(1951)年閉坑

主に人員昇降に使われた第二立坑の関連施設が残されています。現在、有料で常時一般公開が行われています。

採掘可能な区域を広げるため、宮原坑に続いて万田坑の開発が始められました。明治35(1902)年に出炭操業が始められた第一立坑は、その深さが約270mにも達し、2台の巻上機と4台のケージが使われるなど、それまでにない大規模な施設となりました。

三池港の開港ともあいまって、出炭量は増加の一途をたどり、昭和15(1940)年には年間113万トンを記録しています。

現在も残る第二立坑は主に人員昇降と排気を目的とした坑口でした。

⑦四山坑

所在：荒尾市大島
T12(1923)年操業開始、S40(1965)年坑口移転

閉山前年である平成8(1996)年に、旧四山坑の立坑櫓は解体され、現在敷地は更地となっています。

三池炭鉱の炭層は南西に向かって緩やかに傾斜しています。そこで大浦坑や七浦坑などから万田坑へと、順次南西に新しい坑口をもうけ、坑道も長く延びていました。運搬や通気に支障をきたしていたため、あらたに海岸線沿いに設けられたのが四山坑です。

揚炭を主用途とする鉄筋コンクリート製第一立坑櫓の上部には、三池炭鉱初の電動巻上機が据えられていました。

(港沖立坑)

所在：大牟田市新港町
S40(1965)年操業開始、S62(1987)年三川鉱に統合

立坑櫓は撤去されていますが、関連の建物が一部現存しています。島原行きの高速船上から見ることができます。

三池港突堤南側に、初島に続く人工島が築かれました。ここに設けられた坑口が港沖立坑です。本来は入気坑でしたが、三池争議中、坑内に就労するためにこの坑口が利用されたこともあります。

昭和39(1964)年に新たな立坑櫓が建設され、翌年から四山坑でおこなっていた人員の昇降がこちらで行われるようになりました。なおこの櫓は田川伊加利立坑のものを再利用したものです。

⑧三川坑

所在：大牟田市新港町
S15(1940)年操業開始、H9(1997)年閉山

第二斜坑口、巻上機室、コンプレッサー室、鉱長室などが残されていますが、現在は立ち入ることはできません。

三川坑は本格的な海底炭鉱開発のための坑口で、戦後三池炭鉱の主力坑でした。

三池港に隣接した三川坑には大型の選炭場が設けられ、効率的な石炭の選炭・出荷のために、坑内で繋がる四山鉱や宮浦鉱の揚炭も行われました。

さらに昭和52(1977)年に有明鉱との連絡坑道が貫通し、閉山まで三池炭鉱の揚炭を一手に引き受けました。

昭和天皇の入坑や、三池争議・炭塵爆発事故など、三川坑は戦後の三池炭鉱での大きな事件の舞台となった坑口でもあります。

⑨有明坑

所在：みやま市高田町昭和開1番地
S51(1976)年操業開始、H9(1997)年閉山

閉山後しばらく坑外施設は保存されていましたが、現在では2つの立坑櫓が残るだけです。

有明坑は、三池炭鉱の閉山時に人員の昇降が行われていた坑口です。当初開発を手がけたのは日鉄鉱業(株)です。三池炭鉱北側鉱区の開発のため、昭和33(1958)年から工事を始めました。2本の立坑は完成したのですが、大量の湧水などにより、開発は中断されました。

その後三井鉱山が開発を継続し、昭和51(1976)年、出炭を開始しました。翌年、三川鉱と結ぶ連絡坑道が完成し、揚炭は三川坑に集約され、平成元(1989)年からは人員昇降坑口が有明坑に一本化されたのです。

(備考)有明坑の立坑櫓は、現在撤去されています。

資料：大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ作成

大牟田の近代化産業遺産ガイドマップ

2015年7月世界文化遺産登録
「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」

わが国は、イギリスでの産業革命以降、西洋以外の地域で初めて、かつ極めて短期間のうちに、近代工業化を果たし、飛躍的な発展を遂げました。この世界史的にも特筆すべき発展の過程の証左が「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」です。

2008（平成 20）年 10 月に「九州・山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録推進協議会を設置し、各施設が存在する8県 11 市の自治体が連携して、世界文化遺産登録への取組みを進めました。同遺産は 2009（平成 21）年 1 月にユネスコの世界遺産暫定一覧表に記載され、2015（平成 27）年 7 月に世界文化遺産に登録されました。この遺産の大きな特徴は、九州・山口等に点在する、日本の近代化に貢献した遺産 23 資産で一つの世界遺産（シリアル・ノミネーション）となっている点です。また、三池港のように当時から現在まで稼働し続けている施設、稼働資産が含まれている点も大きな特徴です。

構成資産【1850～1910年に造られた８県11市23資産】

（旧本事務所）　（修繕工場）　（旧鍛冶工場）　写真提供：新日鐵住金（八幡製鐵所）

「明治日本の産業革命遺産」の構成資産　三池炭鉱関

三池港、宮原坑、専用鉄道敷跡、万田坑、三角西港

◆三池炭鉱関連資産の世界遺産としての価値

「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」は、日本が西洋以外で初めて、かつ極めて短期間のうちに近代工業化を果たし、飛躍的な発展を遂げたことを示す遺産群です。その中で、三池炭鉱関連資産は、積極的な洋式採炭技術の導入により石炭の増産体制を確立し、海外への石炭輸出により外貨を獲得、日本の近代工業化をエネルギーの面で支えました。

三池炭鉱関連施設は、「坑口」「鉄道」「港湾」といった一連の炭鉱産業景観が良好な状態で残っています。

日本一の出炭量を誇った日本の近代化の象徴

大牟田における石炭発見の歴史は古く、1469年（室町時代）、地元の農夫が焚き火の中で燃える石を見つけたという記録が残っています。

1873（明治6）年、官営化された三池炭鉱は、長崎の高島炭鉱に続き、西洋の技術を導入し、近代化を進めました。1889（明治22）年、三井に払い下げられ、勝立坑、宮原坑、万田坑などが次々と開坑されました。

併せて、石炭運搬効率化のため、各坑口と港を結ぶ、三池炭鉱専用鉄道が敷設されました。今も各坑口と三池港を結んだ鉄道の路床を見ることができます。

三池港は、1908（明治41）年に三井によって築港されました。干満の差の大きい有明海で港の水位を保つための閘門施設が現在も稼働しています。

1908（明治41）年頃の宮原坑

「石炭山の永久などということはありはせぬ。築港をやれば、そこにまた産業を興すことができる。築港をしておけば、いくらか100年の基礎になる。」

團　琢磨
（1858～1932）

13歳で、岩倉使節団に留学生として同行・渡米。三池炭鉱の三井への払い下げと共に、三池炭鑛社の事務長に就任した團琢磨は、イギリス製大型排水ポンプ（デビーポンプ）の設置や三池港の築港など、世界の最新技術の導入により、三池炭鉱の発展、わが国の近代工業化に多大な功績を残しました。晩年は、日本工業倶楽部初代理事長、日本経済連盟会（経団連の前身）初代会長に就任しました。

①三池港

1908（明治41）年開港【大牟田市新港町】

日本で唯一の閘門式の港。三池港築港以前は、大牟田川から小型船により口立津港（長崎県南島原市）や三角西港（熊本県宇城市）まで石炭を移送し、そこで大型船に積み替え、海外へ輸出していました。三池港の築港により、直接、三池港から海外へ石炭の輸出が可能となりました。

三池港は、遠浅で干満の差が激しい有明海でドック内の水位を一定に保つため、閘門式水門を有しており、港の全形がハミングバード（ハチドリ）に似た形をしています。

【西鉄バスで、展望台へ【「大牟田駅前」バス停（東口）から荒尾駅前行「三川町1丁目」下車、徒歩8分】】

②三池港閘門

1908（明治41）年竣工

遠浅で干満の差が大きい（5.5m）有明海で、ドック内の水位を一定に保ち、大型船が停泊・石炭積込ができるように造られ、現在も稼働しています。

※閘門は非公開。閘門開閉時間（予定）はホームページをご参照下さい。ホームページアドレスは裏表紙に記載

1

連資産

③旧長崎税関三池税関支署

1908(明治41)年開庁【大牟田市新港町1-324】

三池港の開港と同時に開庁。三池炭鉱の石炭が海外へ輸出されたことを示す貴重な施設です。

2014年:県指定有形文化財
2016年:国指定史跡

【大牟田駅から車で10分】

※公開日:土日曜、祝日(年末年始を除く)
時間:9:30~17:00(最終入場16:30)
無料

④宮 原 坑

1898(明治31)年開坑【宮原町1-86-3】

第二竪坑櫓は、我が国で現存する最古の鋼鉄櫓(明治34年築)です。当時、世界最大級のイギリス製デビーポンプを備え、湧水対策に対処しました。1931(昭和6)年の閉坑まで三池集治監から囚人労働が行われました。

1998年:国指定重要文化財、2000年:国指定史跡

【西鉄バスで、大牟田駅から勝立方面へ早鐘眼鏡橋下車、徒歩7分】

※公開日:毎日公開(年末年始を除く)
時間:9:30~17:00(最終入場16:30) 無料

●TEL 0944-41-2539(宮原坑)

⑤三池炭鉱専用鉄道敷跡

1905(明治38)年 全線開通

石炭や炭鉱資材、鉱夫などを運んでいました。1900(明治33)年に七浦坑~宮原坑~万田坑間が開通。1905(明治38)年、三池港まで全線開通しました。最盛期には総延長150kmにもおよびました。

2013年:国指定史跡 ※宮原坑付近から見学できます。

⑥万 田 坑

1902(明治35)年開坑【熊本県荒尾市原万田200-2】

万田坑は、宮原坑に続き開削された坑口で、当時、炭鉱業界の模範となるような坑口施設を作るため三井が総力を挙げて建設したものです。明治時代に作られた炭鉱施設としては、わが国最大規模となっています。

1998年:国指定重要文化財、2000年:国指定史跡

【大牟田駅から、西鉄バスで笹林・一部橋経由倉掛方面へ神田又は倉掛下車。荒尾駅から、産交バスで、万田中・倉掛方面へ万田坑前下車】

※公開日:月曜日、年末年始を除く毎日公開(月曜日が祝日の場合は翌日)
時間:9:30~17:00(最終入場16:30) 大人410円、高校生300円、小中学生200円

●TEL 0968-57-9155(万田坑ステーション)

⑦三 角 西 港

1887(明治20)年開港
【熊本県宇城市三角町】

明治の三大築港のひとつ。三角西港は、三池港が築港される前まで、口之津港の補助港として三池炭を上海・香港等へ輸出していました。現在も築港当時の姿をとどめています。

2002年:国指定重要文化財、2004年/2007年:国登録有形文化財/2015年:国重要文化的景観

【JR三角駅から、産交バスで[三角西港前]下車】

※公開日:火曜日、年末年始を除く毎日公開
時間:9:00~17:00 無料

●TEL 0964-32-1111(宇城市商工観光課、文化課)

2

まだまだあるヨ！

大牟田の近代化産業遺産

Miike Coal Mine

いつも歩いている街中、何気なく見ていた建物などが、その当時の技術を駆使して造られ、現在も活用されています。散歩や、ドライブの途中寄り道して、「産業都市大牟田」の歴史を感じて下さい。

⑤旧三川電鉄変電所(株)サンテン本社屋)

1909(M42)年以前に建造された三池炭鉱専用鉄道の変電所。切妻平屋レンガ造り。レンガはイギリス積み。

⑯旧三池炭鉱専用鉄道電気機関車

アメリカゼネラルエレクトリック社で製造された1908(M41)年の電気機関車など、石炭運搬などに使用された4台の電気機関車が保存されています。(現在三川坑跡で展示中)

⑪大牟田市役所本庁舎旧館

1936(S11)年竣工。4階中央の元貴賓室にマントルピース、カーテンボックス、壁や柱の彫刻が残り往時の様子が偲ばれます。

⑭三井化学(株)大牟田工場(JR工場)

ドイツの染料工場を参考に1938(S13)年竣工。鉄筋コンクリート7階建。当時は東洋一の高さを誇る街のシンボルでした。

⑱三井化学専用鉄道
(旧三池炭鉱専用鉄道)

石炭や資材の運搬用鉄道として1891(M24)年から敷設が始まり、最盛期には総延長150kmにも及びました。閉山後、大部分は撤去され、現在は宮浦とJR鹿児島本線間約1.8kmで化学製品や材料の運搬に使われています。

⑦宮浦坑跡(宮浦石炭記念公園)

1888(M21)年開坑。三池炭鉱の主力坑の一つ。現存する煙突は1888年建造、高さ31.2m。

⑮勝立坑跡

1895(M28)年開坑。第二竪坑櫓の基礎が残っています。坑内排水のため初めてデビーポンプを導入しました。明治から昭和にかけて囚人労働が行われていました。

㉑旧山ノ神神社

炭鉱の守り神として愛媛県の大山祇神社より分祀され、坑口や社宅に祀られました。閉山後多くの社殿はなくなりましたが、勝立坑のそばに建てられたこの社殿は大きな鳥居や狛犬とともに今も残っています。

⑫旧大牟田商工会議所

1936(S11)年竣工。大牟田市役所本庁舎旧館と同じ年に竣工。鉄筋コンクリート造陸屋根2階建は当時の先端で、商工業近代化の拠点となりました。

⑲泉橋

1916(T5)年竣工の、市内で最も古い鉄筋コンクリート橋。路盤が大きくハの字に開き、高欄の格子間のデザインがユニークで、かつて橋の南にあった炭鉱医局(病院)へのエントランスとしての機能も持っていました。

●人工島(初島)

海底採炭の鉱区が広がるにつれ坑内換気のため人工島が築かれました。1951(S26)年完成の初島は直径120mで、沖合い約2km、水深4m、1970(S45)年完成の三池島は直径92m沖合い5.5km、水深約10m、ともに軟弱な海底の上に、当時の土木技術を駆使して造られました。

⑥旧三井港倶楽部

1908(M41)年竣工。船員の休憩所や政財界の社交場として建てられ、現在はレストランや結婚式場として活用されています。(毎週火曜日休)0944-51-3710

⑧旧三池集治監外塀及び石垣(現 県立三池工業高校)

1883(M16)年開庁の石炭採掘を主な目的とした囚人収監施設。高さ5～6m、全長600mのレンガ造。1931(S6)年閉庁。

⑬三池炭山創業碑

1930(S5)年設置の炭鉱創業記念碑。碑の側面には、官営時代を中心に三井による経営が始まる以前の三池炭鉱の歴史が記載されています。

⑰クレーン船「大金剛丸」

1905(M38)年以前製造のイギリス製浮クレーン。三池港築港作業に使われました。燃料は石炭で、クレーン最大用り上げ能力15トン。三池港の展望所から見学できます。

⑳焚石山鎮守社稲荷石祠

炭鉱の守り神として、三池藩主立花種恭によって1861(万延2)年建てられたものです。明治以降、下賜された森家に伝来していたが、本来は石炭発見の伝承地、稲荷山にあったといわれています。(現在は石炭産業科学館に展示)

三川坑　戦中戦後を通して三池炭鉱の主力坑として活躍。三池炭鉱の歴史を語るとき、はずせない施設です。

三川坑 MAP D-3

現在の二坑口

三川坑は1940(昭和15)年の開坑で、有明海の海底下、深さ350mに届く長さ2050mの斜坑2本を備えてました。ベルトコンベアによる連続出炭が可能となり、坑外には選炭工場やホッパー、修繕工場など多くの施設を備え、閉山まで出炭していました。戦中は労働力不足を補うための戦時捕虜の就労や強制的な労働が行われたり、戦後は争議や炭じん爆発など大きな出来事が起こったところでもあります。

閉山後、三川坑施設の多くが解体されましたが、今も第二斜坑の坑口や巻揚機室、繰込場や事務所棟などが残っています。また、かつて炭車を引いていた電気機関車4両も展示しています。

展示中の炭鉱電車

空から見た三川坑

三池炭鉱の歴史を資料と映像で紹介します。

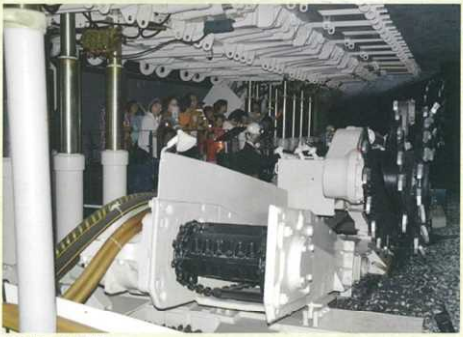
明治日本の産業革命遺産
「三池エリア」のガイダンス施設

大牟田市石炭産業科学館

MAP B-3

国内でもっとも古い石炭発見の記録が伝わる「三池炭鉱」。館内には採炭機械やさまざまな時代の坑内の模型を展示し、そして三池炭鉱に関わられた多くの人々のインタビューを上映。三池炭鉱の発展と、携わった人たちの想いと努力の足跡に触れてください。

世界文化遺産インフォメーションコーナー



ダイナミックトンネル

MAP B-3

利用案内　TEL0944-53-2377

開館時間

午前9時30分～午後5時

休館日

年末年始。
毎月最終月曜日

観覧料（消費税含む）

	個人	一般団体	土曜日・学校団体
4歳～中学生	200	150	130
高校生	410	300	250
大人	410	300	－

※25名以上は、団体料金が利用できます。身体障がい者割引制度があります。
図書室・展望台コーナーの利用は無料です。

身体障がい者用トイレ有
車いす、ベビーカーの貸出し（無料）
駐車場30台（無料）
大型バス可

お待ちしています

■年表

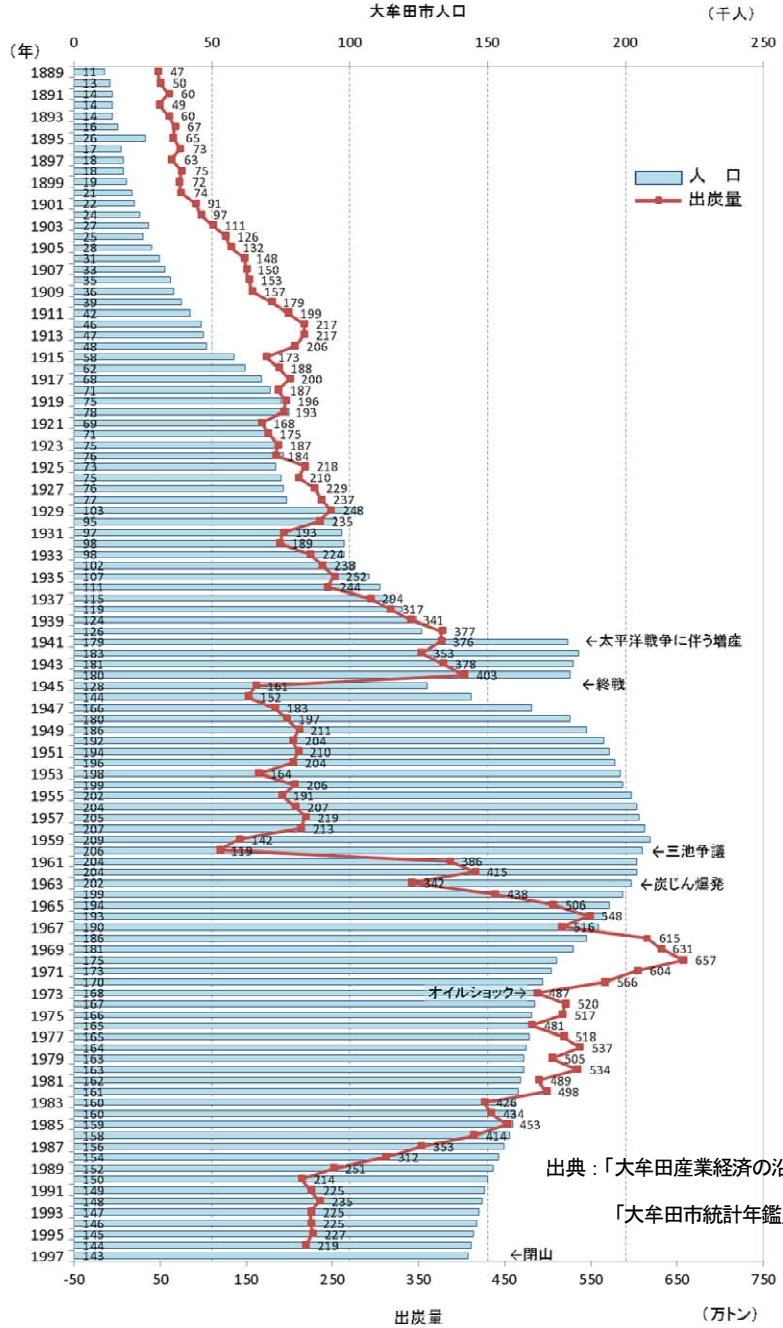
	西暦	三池炭鉱関係	大牟田市・国内情勢
室町時代	1469 文明元	三池郡稲荷村の農夫傳治左衛門により石炭発見	
江戸時代	1721 享保6	柳河藩家老小野春信、平野鷹取山を開坑	
	1790 寛政2	「三池藩石山法度」制定	
	1853 嘉永6	三池藩、生山を開坑	
	1857 安政4	大浦坑開坑	
明治時代	1873 明治6	日本坑法公布、三池炭鉱が官営となる	
	〃	工部省三池鉱山支庁を大牟田村に設置	
	1874 明治7		大牟田郵便局設立
	1877 明治 10	石炭搬出のため、大牟田川河口の航路拡大に着手	
	1878 明治 11	大浦坑−大牟田港間に馬車鉄道敷設	
	1883 明治 16	七浦坑操業開始（～昭和6年閉坑）	
	〃	三池集治監開庁、後に三池監獄、三池刑務所と改称（～昭和6年閉庁）	
	1888 明治 21	宮浦坑操業開始（～昭和 43 年閉坑）	
	1889 明治 22	政府から三井組へ三池炭鉱の経営権の引渡完了	町制施行、大牟田町、三池町ができる
	〃	三井組、三井物産、三井銀行の3社で三池炭礦社設立	
	1891 明治 24	九州鉄道（現JR九州） 大牟田駅開設	
	〃	横須浜～七浦坑間に三池炭鉱専用鉄道開通	
	1894 明治 27	七浦発電所開設、坑外に初めて電灯ともる	日清戦争始まる
	1895 明治 28	勝立坑操業開始（～昭和3年閉坑）	
	1896 明治 29		郡制施行、三池郡大牟田町となる
	1898 明治 31	宮原坑操業開始（～昭和6年閉坑）	
	1901 明治 34	宮原坑第2竪坑竣工	
	1902 明治 35	万田坑操業開始（～昭和 26 年閉坑）	
	〃	三池港起工	
	1904 明治 37		日露戦争始まる
	1905 明治 38	三池炭鉱専用鉄道全線開通	
	1908 明治 41	三池港竣工、開港場に指定	
	〃	長崎税関三池税関支署開庁	
	〃	三井港倶楽部開館	
	1912 明治 45	我が国初のコッパース炉操業、ガス、タール工場運転開始（三井化学の前身）	
	〃	港務所−万田坑間専用鉄道が電化	

	西暦	三池炭鉱関係	大牟田市・国内情勢
大正時代	1914 大正3	神岡鉱山三池亜鉛製錬所が亜鉛製錬操業開始	第一次世界大戦始まる
	1916 大正5	電気化学大牟田工場が操業開始	石炭化学コンビナートの形成
	1917 大正6		市制施行
	1923 大正 12	四山坑操業開始（～昭和 40 年閉坑）	関東大震災
	1924 大正 13	宮浦大斜坑出炭開始	
	1926 大正 15	市制 10 周年記念国産共進会開催	銀水駅開設
昭和時代	1929 昭和4		三川町を市に編入 御大典記念グラウンド竣工
	1930 昭和5	坑内請負制度廃止、女子坑内夫の入坑禁止	
	〃	囚人の採炭作業や馬匹使役を廃止	
	1931 昭和6	宮原坑、七浦坑閉坑（宮浦・万田・四山の3坑体制）	満州事変勃発
	1932 昭和7		大牟田商工会議所設立
	1935 昭和 10	東洋高圧(現三井化学)大牟田工場竣工、硫安製造開始	
	1936 昭和 11		大牟田市役所新築落成
	1939 昭和 14	九州鉄道線（現西鉄天神大牟田線）全線開通	
	1940 昭和 15	三川坑操業開始（～平成9年閉坑）	
	1941 昭和 16		玉川村・駛馬町・三池町・銀水村を市に編入 真珠湾攻撃により第2次世界大戦参戦
	1944 昭和 19	戦前における出炭量最高を記録（403 万トン）	
	1945 昭和 20		空襲、終戦
	1949 昭和 24	人工島初島排気竪坑建設	
	〃	昭和天皇が三川坑に御入坑	
	1951 昭和 26	人工島初島完成	
	1952 昭和 27		市内電車が廃止
	1953 昭和 28	人工島初島三池第2人工島完成	
	1954 昭和 29		市民会館落成
	1956 昭和 31		市立動物園オープン
	1957 昭和 32		市制 40 周年記念事業、大牟田産業科学大博覧会開催
	1959 昭和 34	三井三池製作所が三井鉱山から独立	市の人口が過去最高となる
	1960 昭和 35	三池争議（戦後最大の労働争議）	
	1962 昭和 37	原油の輸入自由化	
	〃	産炭地域振興法に基づく6条地域に指定	
	1963 昭和 38	三川坑炭じん爆発事故（死者 458 名）	
	1964 昭和 39		新産業都市に指定 東海道新幹線営業開始 東京オリンピック開催
	1965 昭和 40	第2人工島に四山坑　坑口移転	

	西暦	三池炭鉱関係	大牟田市・国内情勢
昭和時代	1969 昭和 44		西鉄新栄町駅及び商店街建設開始
	1970 昭和 45	第3人工島三池島完成	
	〃	出炭量過去最高を記録（657 万トン）	
	1971 昭和 46	三池港が三井の私港から県管理港となる	
	1972 昭和 47		九州自動車道南関インター開通
	1976 昭和 51	有明坑　出炭開始	
	1980 昭和 55		大牟田市再開発市民会議結成
	1984 昭和 59	有明坑　坑内火災（死者 83 名）	
	1986 昭和 61	第8次石炭政策答申	
	1987 昭和 62		九州帝京短期大学(現帝京大学福岡キャンパス)開校
平成時代	1995 平成7	石炭産業科学館オープン	ネイブルランドオープン
	1996 平成8	宮浦石炭記念公園オープン	大牟田テクノパーク起工
	〃	旧三池集治監外塀及び石垣が県指定有形文化財となる	
	1997 平成9	三井三池炭鉱閉山（3月 30 日）	
	1998 平成 10	旧三池炭鉱宮浦坑煙突が国登録有形文化財となる	ネイブルランド閉園
	〃	宮原坑跡・万田坑跡が国指定重要文化財となる	
	2000 平成 12	宮原坑跡・万田坑跡が国指定史跡となる	
	〃	サンデン本社屋（旧三池炭鉱三川電鉄変電所）が国登録有形文化財となる	
	2001 平成 13		「ゆめタウン大牟田」開業
	2002 平成 14		大牟田エコサンクセンターオープン 大牟田・荒尾RDFセンター稼働 大牟田リサイクル発電所稼働
	2003 平成 15	産業再生機構、三井鉱山支援を決定	
	2004 平成 16		「松屋」経営再建断念
	2005 平成 17	旧三井港倶楽部が市指定有形文化財となる	
	2006 平成 18	「近代化遺産保存活用基金」設置	
	2008 平成 20	三池港開港 100 周年記念事業開催	「有明海沿岸道路」大牟田・大川部分開通
	2009 平成 21	「九州・山口の近代化産業遺産群」が、世界遺産国内暫定一覧表記載（宮原坑・万田坑）	市内経済界により、團琢磨胸像（旧三井港倶楽部）、團琢磨像（新大牟田駅）設置
	2010 平成 22	旧長崎税関三池税関支署が市指定有形文化財となる	「メガソーラー大牟田発電所」運転開始

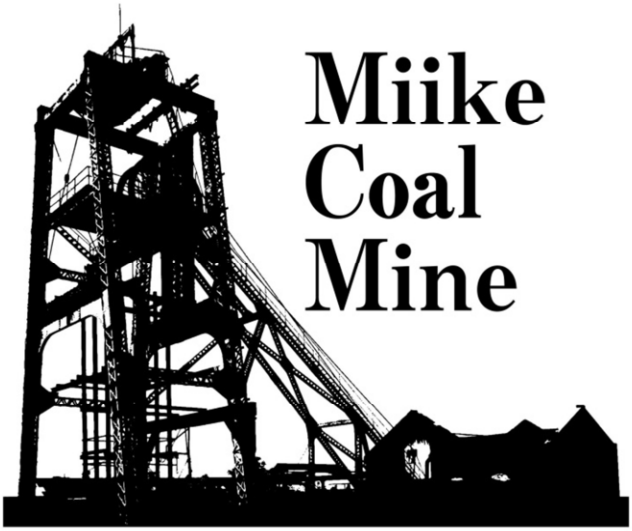
	西暦	三池炭鉱関係	大牟田市・国内情勢
平成時代	2011　平成 23		九州新幹線新大牟田駅開業 「イオンモール大牟田」開業 東日本大震災発生
	2012　平成 24 〃 〃	旧長崎税関三池税関支署の修復完了 「大牟田市近代化産業遺産を活用したまちづくりプラン」策定 三川坑跡、閉山後初の一般公開	「有明海沿岸道路」大牟田・三池港間開通
	2013　平成 25 〃 〃	三井三池炭鉱跡宮原坑跡万田坑跡専用鉄道敷跡が国指定史跡に追加指定 「明治日本の産業革命遺産　九州・山口と関連地域」が、政府推薦案件に決定 三川坑炭じん爆発 50 年式典開催	市民活動等多目的交流施設「えるる」オープン
	2014　平成 26 〃 〃 〃	「明治日本の産業革命遺産　九州・山口と関連地域」ユネスコへ政府推薦書を提出 旧長崎税関三池税関支署が県指定有形文化財となる イコモスによる調査・審査の実施 「三川坑跡及び周辺施設の保存・活用に係る基本構想」策定	帝京大学新キャンパスが岬町に開校
	2015　平成 27	「明治日本の産業革命遺産　製鐵・製鋼、造船、石炭産業」が、世界文化遺産に登録	
	2017　平成 29		市制 100 周年を迎える

■大牟田市の人口と出炭量の推移(明治 22 年以降)



出典：「大牟田産業経済の沿革と現況」

「大牟田市統計年鑑」



炭鉱とくらしの記憶　－エピソード集３－
・平成 30 年３月発行
・編集・発行：大牟田市企画総務部世界遺産・文化財室
http://www.city.omuta.lg.jp/
〒836-8666　福岡県大牟田市有明町２丁目３番地
・発 行 協 力：大牟田市石炭産業科学館
http://www.sekitan-omuta.jp/
大牟田市近代化産業遺産を活用したまちづくり協議会
NPO 法人　大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ
http://www.omuta-arao.net/
・印刷・製本：株式会社　野口印刷所